



昔の義士は「忠臣蔵」
 今の忠烈は「三勇士」



文楽
 人形浄瑠璃
 四月興行



部
 金拾五錢

文楽座 四つむし

世界に誇る

本朝武士道の精華

陽春の候に御座ぬます、皆様には益々御機嫌おうるはしくおられ欣慶至極に存じ上げます。

さて、當座の四月は今や國を擧げての重大時機に鑑み、古今の忠君愛國心の發露、昔の義士は「忠臣蔵」今の忠烈は「三勇士」の特別興行と臻し大方皆様の燃ゆるが如き祖國愛に副ひ奉らんと致す次第であります、爰に世界に誇る、郷土藝術が世界の花と謳はるゝ忠勇義烈の相を併せて上演するは寔に有意義なことを存じます、わけて「三勇士」上演は全く劃期的と申すべく、これも偏に皆様方の厚き御支援によるところと一同躍然として熱演いたしますれば、何卒より以上の御後援をお願い申上ります。

昭和七年四月一日

四ッ橋
文樂座

昭和七年四月一日初日

初日・二日目 一時開幕
三日目より 二時開幕

御觀覽料

- 一 等椅子席 御一名 金三圓
- 二 等 席 御一名 金一圓五十錢
- 三 等 席 御一名 金八十錢
- 一 等お座席 御一名 金三圓五十錢

一 等お座席 は五日前より
一 等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七二一番
專用電話 七四〇八番
電話 南 三七八八番

お草履の準備は御座ぬます、靴草履はそのまゝ、御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へツカト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪西區土佐堀通一丁目

長三〇八番
四九四番
四九九番
四四九番

(44) 土佐堀



文樂座人形淨瑠璃

四月特別興行

三日目より豫定時間表

前
假か名な手て本ほん忠ちゆう臣しん藏くら

大序兜改めより
山科閑居まで

兜改めの段 (二時より二時三十分まで)

幕間 十分間

下馬先進物の段 (二時四十分より三時まで)

殿中及傷の段 (三時より三時二十五分まで)

裏門の段 (三時二十五分より三時四十分まで)

震辰ケケ谷の段 (三時四十分より四時十分まで)

段ケケ關の段 (四時十分より四時五十分まで)

幕間 十五分間

二ツ玉の段 (五時五分より五時三十分まで)

身賣の段 (五時三十分より六時まで)

勤平切腹の段 (六時より六時四十分まで)

幕間 二十分間

祇園一力の段 (七時より七時四十分まで)

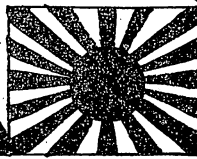
幕間 十分間

道行旅路の嫁入の段 (七時五十分より八時廿五分まで)

山科閑居の段 (八時二十五分より十時まで)

幕間 十五分間

切
三勇士名譽肉弾 三段
松居松翁原作・鶴屋南北脚色
鶴澤大次郎作曲・松田稻次舞臺監督
(十時十五分より十時四十五分まで)



竹田出雲と周囲の人々

忠臣藏初興行のこと

近松門左衛門逝き、竹本播磨少掾
歿後の淨瑠璃界は、當然の歸趨でも
つて、その實權が作者としての奇才
興行主としての辣腕家たる、竹田出
雲の手に移つて、義太夫節は暫く太
夫を離れ、従つてすこしづゝ其容を
變へて行くのは是非もないことであ
つた。すでに十五歳にして竹本座の
座主であつた（父竹田近江の後見は
あつたにせよ）出雲は長ずるに従つ
て十二分の經驗に加ふるに、殆んど
天才的の手腕をもつて縦横に活躍し
たのである。さうして道頓堀の黄金
時代、古今無比の最盛期を現出した
と傳へられる。

延享版の『浄るり譜』は
此頃操り流行して歌舞伎は無きが
如し、芝居表は數百本の幟、進物等
敷を知らず、東豊竹、西竹本、と相

撲の如く東西に別れ、町中近國ヒイ
キをなし操りの繁昌言はん方なし。
と云ひ、又寶曆版の『竹豊故事』には

操り繁昌し東は西に負けじ、西は
東に勝たん。と互ひに勵み出來、益々
芝居繁昌し、淨瑠璃の作者種々様々
の趣向をあみ出し、道具立衣裳に金
銀を措します、美麗を盡し、町中の
若い衆、豊竹講、竹本講と號し、毎
月掛け錢を集め置き、替り淨瑠璃の
節進物の入用に仕玉ふさかや、倍々
奇特千萬なる心中益々信仰なさるべ
し。

と云つてあるところをもつて、略
ぼその盛觀を察することが出来る。
されば淨瑠璃界に一轉機を起した傑
物出雲の作物を通じてその興行ぶり
を見てみやう。作者としての出雲は
近松在世のころ、享保八年二月、三

十三歳の時、松田和吉との合作で『
大塔宮囃鏡』を書き、近松の添削を
乞ふて、その處女作を發表し、その
二度目には（同年十一月）『櫻町名花
昔』といふ世話物を書いたが、これ
は失敗に終つて發表をしなかつたば
かりか、後眞世物語は書かぬと決心
をしたこの事である。さうしてゐる
うちに近松が死んだが爲に、いよいよ
彼は筆を揮はねばならぬ時機に達
し、享保十年九月には『大内裏大友
眞鳥』の傑作を發表して大好評を取
り、眞鳥の本々鼠の糞は何處の家にも
あると云はれる程に、一時に文名
が高まつた。ましてや敵方である東
の芝居の豊竹座の作者、紀海音が享
保八年七月『傾城無間鐘』を終りこ
して引退してしまつたので、彼の時
代が到來したわけである。すでに現
今著名なる、

『忠臣藏』『千本櫻』『菅原』『双蝶
々』『平假名盛衰記』『小野道風』『凱
陣紅葉』（大塔宮）（以上合作）『大
友眞鳥』『五鷹金』『芦屋道満』（以

上單獨作)の十二編を始めその他十二編

の作を見ても解る通り、從來の近松時代の淨瑠璃本位に比して舞臺は著るしく人形本位に傾いて来て即ち歌舞伎化されて来たのである。云ひ換へれば少數が聽いて味ふ藝術が、目に訴へて大衆を迎ふる藝術に變化して来たのである。いふまでもなく興行主であつて作者を兼ねた彼れが當然の執るべき道であつたのである而かもその傾向は夥しい社會の反響を受けたので。出雲の技能は人形遣ひ吉田文三郎の卓抜な技術と相俟つて、新しい形式をこしくこ試み、觀客をして應接に遠なからしめてゐる。さうして人形界と歌舞伎界の双方へ向けて多くの貢獻を遺すことの出来たのは偉せねばならない。その新形式の重なる一部を記してみよう。

●國性爺の引道具を工夫する、九仙山の景事、千里の鏡、樓門、など支那を想像せしめる珍奇の趣向：正徳五年十一月

●曾我會稽山十塲を一晝夜に仕組み、舞臺の上部に(砂時計)



この番付は寛延元年八月十四日竹本座初演の時の番付です、この時分は床とテスリの二枚番付でありました

の發明者である父近江讓りの大時計を掲げて、時を打たす……享保三年七月

●人形舞臺を重要視して從來正面に在つた太夫の床を左遷して、舞臺全部を提供していよ／＼大道具大仕掛け人形活躍の便宜を謀る時に加賀國篠原合戦上演……享保十三年五月。

●人形の指先動く仕掛けにする。「車返合戦櫻」の大森彦七……享保十八年四月。

●從來は突込みと稱して兩手で人形を差上げて遣つてゐた式を改めて三人遣ひとする。「芦屋道満大内鑑」の與勘平、彌勘平の腹ふくらし……享保十九年十月。

●人形の肩動く仕掛けにする「赤松圓心縁陣幕」本間入道の眉……元文元年二月。

●寫實式の舞臺「夏祭浪花鑑」本水本泥を用ふる試み、

帷子を人形に着せる……延享二年七月。

●人形の耳動く仕掛けにする。

『義經千本櫻』忠信狐……延享四年十一月。

●能離子を用ふ『戀女房染分手網』五ツ目。道成寺の所作……寶曆元年二月。

以上大要。

出雲が生涯の大事件として、人形が如何に重要視せられたかといふ一例證として、果また藝界の一佳話として、而かもそれがお馴染の『假名手本忠臣蔵』の初興行にからまる大騒ぎだったのだから、悉しく説く必要がある。竹田出雲、三好松洛、並木千柳が京都の歌舞伎中村宗十郎座の『大矢數四十七本』といふ義士の芝居を見て、すぐ三人が合作で書き上げた『假名手本忠臣蔵』が竹本座に上演されたのは、寛延元年八月十四日からのことだった。その忠臣蔵があらゆる澤山の義士復仇の芝居を出し抜いて百八十餘年を経た現今ま

で、いまだに歌舞伎や淨瑠璃の獨參湯を稱されて上演せられてゐるほど



竹本座初演の番付で、人形の役割番付、古田文三郎の伴八太郎此時吉田文吾と改名す。

だから、書卸のその當時の人氣も推して知るべしである、これは開場して程経ぬ或る日のこと、くにゆくりなくも一騒ぎが持ち上つて来た。人形の頭領吉田文三郎はいふまでもなく由良之助の人形を遣つてゐた、その文三郎が九段目の山科を語つてゐる太夫の頭領竹本此太夫（後に竹本筑前少掾）の部屋へぬつて現はれて来て、

先達てから申し入れたく思ひ居しが、つい／＼差控へ、言ひおくれたれど、打ち明けて申し談じたき儀あり……。

さかういふ前置きで、舞臺上の相談にやつて来た。その相談さいふのは、山科の場由良之助が本藏に向つて本心を明かし師直邸に忍び入り用心の兩戸を外づす案を實地に示す條『仕様をこゝに見せ申さんと庭に……』といふ語り場を、今少し間を伸して語つて貰ひたい、伸

して貰はないと庭に下りて駒下駄を履き竹箒の傍まで行く間の動作がどうも窮屈でいけない、思入れも充分に出来ずどうも遣ひ苦しいから……。さあ頼み込む體裁で喋つたと思はれる。

ところがこの相談に對して、此太夫は、もう今までに日數も可なり打續けて來てゐる、いまさら節や地合を變更することは出来ない元來かういふことは初日に語り定めた上はどうにもなるものではない、初日同然幾日経ても語り口に狂ひの無いのが私の生命なのだから、それをうか／＼と變更するやうなことがあつては第一私の信用に關はる、だから残念ながら此御相談には應じ兼ねる。と判然と突きはなした。かう云はれると、文三郎さて一旦云ひ出した言葉の上黙つてそのまゝ引つ込んでしまふ譯には行かない。そればかりか實際この庭に、の條には思ひあぐんだのだから思案の變へやうがない、だからもう一度強く、而かもすこし

皮肉を交せて、さう貴君は云はれるだらうと思つた、私も今日まで貴君の方から此ことを注意してくれるだらうと思つて實は心待ちに待つてゐたのだ、元來櫓下の責任者としてある此太夫さもあるもののが「此場合定めし人形は遣ひ難くからう」といふ察しがつかないとは……。とすこし喧嘩腰だつたから憎まれ口を利いた。此太夫さて藝術上のことで一旦吐いた自説は平生の信條に對してと急に狂げるわけには行かないのである。改める、改めない、といふ押問答で、結局互ひに血相を變へて云ひ争ふたが、どうにも解決がつかない。このことを聞きつけて座主の出て雲と二代目の政太夫。三味線の友二郎等が仲に飛んで入つて、さりあへず、まあ／＼と二人を無理に辭めて懇々双方の云ひ分を聽いて見たがどちらも頑として主張を枉げやうとはしない。それで餘儀なく双方を其夜は無事に自宅へ送り歸へしたが、サテ困つたのは出雲である。何方か

一方が折れてくれなければ明日の芝居を開けることが出来ない、さうしてどちらの主張にも道理があるのだからちよつと厄介だ。

そこで出雲はその善後策を協議する爲めに一座の重なる關係者を、閉場後の樂屋に召集して、所謂秘密會議を開いた、かういふ會議といふものはいつの場合でも同じやうに、喧々囂々として、なか／＼とましまりのつかないものであることは誰れにも經驗のあることで、凡そは想像出来るが、結局は座長たる出雲の言葉の一點が議場に於ける濃厚な空氣をつくり上げてやがて歸着點を見出すことになる。大半は賛成々々といふやうな手を揚げて會議は數時間を費して終局となる段ざりである。その所謂多數決によつて決せられたところでは、文三郎は當時竹本座を背負つて立つ唯一の人氣者、ここに今度の八十郎以上の至形は宗藝で神業まで稱讃されてゐるから、此太夫といふ名人を失ふのも惜しいには惜しい

が、どうも文三郎を失つては竹本座全體の損失が多きい、だからもう一度此太夫に讓歩を勸告して、萬一承知をしない場合は休場をさせるより致し方がない。此決議案は早速此太夫の方へ通知されたが、遺がは此太夫だ、すぐに休場を快諾して、己れの藝の自信を重んじて竹本座櫓下の名譽を古下駄を捨ててやうに捨て、しまつた、これでこの問題は一先づ解決したが、あこの問題は此太夫に代つて九段目を受持つ太夫を選定せなければならぬことである。これも可なり大問題だ。出雲は頭を悩ました、ふと立派な候補者が思ひ當つた、それは竹本座の創立にもつとも縁故の深い故内匠理太夫の實子、豊竹上野少掾である、出雲は早速駆けつけ、情理を盡して竹本座の浮沈に關する大事の場合、是非出場を承諾して貰ひたいと懇願した。上野少掾も出雲の熱誠に動かされて半ば承諾をしたが、その前に一應此太夫と會見をしたいと云つた。そこで早速此太

夫に通じて、日本橋一丁目の出雲の宅で三人は會見した。上野少掾は此太夫に向つて竹本座引繼ぎの挨拶を述べた、此太夫も快よくこれに答へさうしてお互ひに九段目の作意やら語り口など藝術談をして恰も百年の知己の感があり、好都合に運ばれて行き、どうやら無事に濟んだ。出雲はほつと吐息をついたのである。これだけの波瀾重疊が、たつた一夜の中に、出雲の努力で收まつたのである。かうして竹本座は幸ひに休場をせずして打ち續けることが出来、これが間もなく市中の評判となつて一層の好人氣、上野少掾は竹本大隅掾と改名して、これも甚だ好評、興行日數の積む程に益々人氣は騰るばかりである。何が幸ひになるかわからないものだ。さてこの問題に關聯して大隅掾の人格を物語るべき美しい例證がある。

大隅掾は此太夫に代つて九段目と七つ目の掛合ひの由良之助を勤めるのだが、竹本座で用意をして置いた

出版用院本の原稿を見るに七つ目掛合ひの由良之助は因とあつてちやんさ大隅の名に代へられてゐる。これを見た大隅は斷じてこれを拒んで、かう云つた。自分は途中代り役として勤めてゐるのである院本は未代まで残る大切の記念だから、譬へ此座を退座して行つても、當然此太夫の名義を用ひなければならぬ。さかういふ理由で急に因の字を削らせて圓の字に改めさせた。謙讓の人で無くては出来ない業である。現存七つ目の院本由良之助役に圓の一字が入つてゐるのは、かうした美談がたつた一字に含まれて斯道の人々に何かの暗示を與へてゐる。

さうして一方此座を退いて行つた竹本此太夫はどうなつたかといふことは人々の勤めにまかして、島太夫、百合太夫などを率ゐて、東の芝居豊竹座に轉じて櫓下に据はつたがこれも飽くまで善意で酬ひて、わざ／＼竹本座の『忠臣藏』の終るのを待つて、同年十一月十四日初日で『

攝州渡邊橋供養』を上演してゐる。ところか、此方も脱退一件や何かで市中の噂となつてゐるだけに、意外な人氣が集まつて翌年の三月まで五月に亘る大入滿員といふ芽出度まである。かういふ次第で、興行界はいつとも空氣を新鮮にする爲めに入れ替へをしなければいけない、といふ先例が作られて、その後の兩座へは、時々太夫の入れ替へが行はれてゐるこの東西兩座の出方が混亂すると云ふ事は此時が始めて、古來の一座固定式が自ら打破された譯である。

二百年の後までも、絶え間なく、多くの見物を騒がして來た『假名手本忠臣藏』は、先づ初興行からしてどうした大きな興行主兼作者太夫、人形を騒がしたのだつた。此時、出雲五十八歳、此太夫四十九歳、大隅四十七歳、文三郎も五十歳前後であつた。

出雲の略歴を摘記する。

元祿四年大阪に生る（江戸説もある）

寶曆六年十一月四日歿す。（行年六十六歳）

幼名三四郎。後清定。號千前軒（千日寺の前の意、住宅から名付く）。

定紋、竹の丸に丸枚笹。立慶町、吉右衛門町（清津橋より戎橋までの間）

兩町の年寄役を勤む。

墓地、生玉寺町青蓮寺。法名、文

明院峯松立顯居士。

門人、小出雲、吉田冠子（文三郎）

竹田正藏（爲永太郎兵衛）竹田外記

竹田瀧彦。竹本三郎兵衛。竹田因幡

竹田和泉。竹田平七。竹田伊豆。竹

田土丸。二步堂。松田和吉。その他

竹田出雲の股肱となつて其大業を

援け、此太夫と覇を争つて自ら重きを爲した吉田文三郎は、一面吉田冠子の名を以て之れ又淨瑠璃の作をのこしてゐるところを見るに、精力家であると同時に、よほど卓抜の技倆をもつてゐる人には違ひない。人形

藝術の上に文三郎の發案として現にそのまゝを踏襲してゐる幾つかの例を擧げることが出来るが、床の淨瑠

璃が歌舞伎式になると同じやうに文三郎の人形も當時としては随分寫實風になつて來たのであらう。その爲め人形の世界に新しい境地がづん／＼見出されて行つたのである。たしかに名匠には違ひなかつた。『夏祭浪花鑑』で始めて人形に帷子を着せ、（お辰の扮装、桔梗の帷子、黒繻子の前帶、淺黃綿帽子。）後世にその型を傳へた如き。或は『義經千本櫻』の道行で狐忠信の耳を動かし黒地に縫金の源氏車の模様を考案した『忠臣藏』の由良之助に二つ巴を付けた。そんな例は擧げればきりがないほどである。

文三郎の人形には人間の魂が躍動してゐるを傳へ、それが一つの怪談嘶になつてのこつてもある。おなじみの五大力の狂言のその元の菊野殺しの芝居についてある。『薩摩歌妓鑑』といふのが本題である。（近松平二や吉田冠子即ち文三郎等の合作）主人公の早田八右衛門が、嫉妬に燃えて、血刀を提げながら、四邊

を探し廻はる途端、すでに殺されてゐた藝妓菊野の死骸の疵口へ片足を踏み込み、爪先に腸を引かけてひき上る科がある。これは文三郎の型であるが、如何にも寫實で眞に迫つてゐる歌舞伎の氣を喰ひそうな場面である。『初嵐元文斬』を改題して、道頓堀で柴崎林左衛門が勤めたが、この時すつかり此文三郎の型を用ひたところが、こゝは人形でなく、實際の人間が演ずるのだから、あまり慘酷で見えぬらしい、さういふので評判がよくなかつた。晝間文三郎によつて魂を吹き込まれた八右衛門の人形が、夜になつて、人靜まつた時、一人で、文三郎に使はれてゐる通りをくりかへし、時には結び上げた髪を振り亂して大荒れに荒れ狂ふ。朝になつて樂屋へ入つたものは此容子を見て膽をつぶして驚く。又或時は肌脱ぎになつて大刀を抜いたまゝ、さも勞れ果てたやうになつて樂屋の入口に仆れてゐる。或る小屋番は彼

の人形が一人で闇をさぐりながら歩いて行くので、後をつけて行くさ、流し場へ下りて水甕に首を突つ込んで舌鼓を打つて水を喰ひ飲んだ。かういふ風はその當時のことが、さも實際に見て來たやうに傳へられてゐるが、眞偽はどうでもいい、文三郎の人形が如何に如實に人間そのまゝの動作をもつて見物に迫つて來たかといふことが想像出來ればよい。



前
假名手本忠臣藏

大序鶴ヶ岡兜改めより

山科閑居段のまで

鶴ヶ岡兜改めの段

直 義 公 竹本源路太夫
 鹽 谷 判 官 竹本町太夫
 若 狹 之 助 竹本長尾太夫
 顔 世 御 前 竹本文太夫
 高 野 師 直 竹本文字太夫
 鶴澤芳之助

人 形

足 利 直 義 吉田文之助
 壺 谷 判 官 吉田玉松
 顔 世 御 前 桐竹紋十郎
 高 野 師 直 桐竹門造
 桃 井 若 狹 之 助 吉田扇太郎
 大 丁 名 大 勢 大 勢

この『假名手本忠臣藏』は寛延元年八月の（今から百八十四年前）竹本座の操にかけられたもので、竹田出雲が正、三好松洛、並木千柳等が補で書下された日本演劇史を代表する最大傑作である。

足利將軍尊氏公は新田義貞を討つてその兜を鶴ヶ岡八幡宮に奉納するに就て今日社頭に兜改めが行はれたが、壺谷判官の妻顔世御前は曾て兵庫司の女官を勤めた故兜改め役として

召され多くの兜の内、焚きしめた蘭奢待の名香に直にそれと見分けた。女好きの高野師直は和歌に事よせて顔世に艶書を送る。短氣な桃井若狹介と意地悪な高野師直と大口論を始め、あはや神前に鯉口を切る所を僅に事なく済む。

この度將軍家接待の役目を承つたのは壺谷と桃井でその禮儀作法萬般の師範役は高野師直である。殿中で桃井が師直に會ふと平伏せんばかりに下に出たので怒も何處へやら消えてしまつた。これは本藏の深慮で賂賄を贈つたからである。壺谷からは賂賄がない上に顔世に對する戀の憎み

があるので師直は搦谷を殿中で散々に苛め恥しめた。短氣の鹽谷は前後を辨へず鯉口切つて師直に斬りつけた。後から抱き止めたのは本藏であつた。殿中で及傷に及んだ搦谷判官は切腹を申しつけられてお家斷絶といふことになつた。此處に忠臣と不忠臣との色分けが見えた。家老大星由良之助は深い分別を以つて速る若武者を鎮めて城を明け渡し悄然と山科へ去る。金に眼の眩んだ搦谷の不忠臣弁九太夫の子定九郎は浪人の生計に困つて、山崎街道で夜盜を働かす通りかゝつたお輕の父與一兵衛はお輕が勘平の爲に身を賣つた金子五十兩を命もろとも定九郎の爲に奪はれた。猪撃ちに出た勘平の二つ彈丸は誤つて、美事に定九郎に當る。奪つ

た縞の財布の五十兩は計らず勘平の手に入る。歸りが遅いと案じられた與一兵衛の宅へはその死骸がかつぎ込まれた。勘平は縞の財布をそつと取出して見て昨夜闇まぎれに撃つたのは舅さ早合點した。姑お萱もそれさ推して怒り歎く。勘平はたさひ主君の仇討ち御用金調達の爲さば言へ現在の舅を殺して金子を取つた事言譯立たず、面目なさに切腹した。其處へ千崎彌五郎、原郷右衛門の兩士が来て刀傷と鐵砲傷は違ふさて勘平の冤罪は暗れ臨終に一味の血判状へ加へられた。由良之助は敵討ちの本心を包んで祇園の一方茶屋にお輕を相手に日毎放埒な浮れ酒、九太夫は敵の謀者となつて大星の本心をうか

の密書を大星が讀んであるとお輕が二階でのべ鏡、九太夫は縁の下から眼鏡越しにのぞく。大星は大事を知つたお輕の命を見平右衛門に命じて取らうとしたがその真心が見へたので助けた。お輕は九太夫を刺して勘平の身替りに功を立てる。旅路の嫁入は大星力彌と許嫁の仲にある加古川本藏の娘小浪は母の戸無瀬に連れられて山科にある大星の閑居を訪れるのです。その途すがらのいと面白きいと華やかな錦繪美たつぷりな條りです。山科閑居は遙々山科の閑居に辿りついた小浪母子は大星の妻のお石からきつぱりさ力彌との縁談を断げられますそれは本藏が搦谷判官を抱きこめたさいふ事の恨みがあつたから

です。母子は生きて歸られずと母は娘の介錯をせんとする門口から待てと止めます、それは母子の後を追ふて先に山科へ来てゐた本藏であります。本藏はわざと毒ついて、力彌の持った槍に突かれます。由良之助へ苦しい言譯をした上、婿へ引出物として師直方の繪圖面を贈ります。此處に一同心がとけて目出度祝言となり、大星は江戸へ發足するといふ忠と義親子恩愛の情懷を見せたる破亂曲折の裡に日本武士道の精華を語るさいふ不朽の名作です。

(床本) 鶴ヶ岡兜改めより

戀歌迄

後にかほよはつきほなく師直様は今暫し御苦勞ながらお役目をお仕舞

有ておしづかにお暇の出たこのかほよ長居は恐れおさらばと立上る袖摺寄てじつと扣へコレまあお待ち待たまへけふの御用仕廻次第其元へ推参して、お目にかけるものが有幸ひのよい所召出された正義公は我爲の結ぶの神御存じのごとく我等歌道に心を寄せ吉田の兼好を師範と頼み日々の狀通其元へ届けくれよと問合せの此書狀いかにもこの御返事は口上でも苦しいないと袂から袂へいる、結び文顔に似合ぬ存参る武藏鑑と書たるを見よよりはつと思へ共はしたのふ恥しめて却つて夫の名の出ること持歸つて夫に見せふかいやく夫では搦谷殿憎しと思ふ心から怪我過にもならふかさももの言はず投返す、人に見せじと手に取上げ戻

すさへ手にふれたりと思ふにぞ我ふみながら捨も置れずくごうは言はぬよい返事聞まではくごいてくごき抜天下を立ふとふせふ共儘な師直搦谷を生ふと殺そふ共かほよの心たつた一つ何んぞそふでは有まいかご聞にかほよ返答も涙ぐみたる斗りなり、折から來合はす若狹之助例の非道と見て取氣轉かほよ殿まだ退出なされぬかお暇の出で隙取は却て上への恐れ早お歸りご追立れば、きやつ扱はけさりしと弱味をくはぬ高野師直ヤア又しても言はれぬ出過ぎ立てよければ身が立たす此度の役目首尾よふ勤めさせくれよと搦谷の内證かほよの頼みそふなくてはかなはぬ答大名でさへあの通り小身者に捨知行誰か陰で取らする師直が口一つ

下馬先進物の段

竹本鏡太夫

鶴澤友之助

鶴澤友平

人形

高野師直 桐竹門造

加古川本藏 吉田玉次郎

鷺坂伴内 吉田扇太郎

腰元おかる 吉田文五郎

早野勘平 吉田榮三

で五器提ふも知れぬあぶない身代夫
でも武士と思ふじやまでと邪覺の返
報にくー、くはつさせき立若狹之
助刀の鯉口碎る程握り詰は詰たれ共
神前なり御前なりと一旦の堪忍も今
一言が生死の詞の先手選御ぞと御先
を拂ふ聲々に詮方なくも期を延す無
念は胸に忘れず、悪事悖て運強く
切れぬ高野師直を、あすは我身の敵
共知ぬ鹽谷が後押へ直義公は悠々こ
歩御成賜ふ御威勢、人の兜の龍頭御
藏に入る數にも四十七字のいろは分
かなの兜を和らげて兜頭巾のほころ
びぬ國の掟ぞ久方の

(床本) 下馬先進物の段

足利左兵衛之督直義公關八州の管領
に新に建し御殿の結構大名小名美麗

をかざる公裝束鎌倉山の星月夜と袖
を列る御馳走にお能役者は裏門口表
御門はお客人御饗應の役人衆正七ツ
時の御登城武家の威光を輝ける。西
の御門の見付の方ハイくくさい
かめしく提灯でらし入來るは歳藏守
高野師直權威を現す真高々花色模様
の大紋に胸に我慢の立烏帽子家來共
を役所くに残し置下部僅に先を拂
はせ主の威光の召おろし鶴の眞似す
る鷺坂伴内肩ぢいからし申しお且
那今日の御前表も上首尾く盪谷で
候のイヤ桃ノ井で候のさ日頃はこつ
ばさつばさごごしめけご行儀作法は豹
をやねへ上た様で去りさはく腹の
かはイヤ夫に付きかれく盪谷が妻
かほよ御前はまだ殿へ御返事致さぬ
由お氣にはさへられな器量はよけれ

ど氣が叶はぬ何んの盃谷づれも當時
出頭の師直様さヤイ、聲高に口利
な主煮かほよ度々歌の師範に事寄せ
くどげ共今に叶へぬ則ち彼が召使が
るさいふ腰元新参ぞ聞きやつをこま
付け頼で見ん、扱まだこりへも有る
かほよが誠にいやならば夫盃谷に仔
細をぐはらりと打明ける所を言はぬ
は樂しみも、四ツ足門のかたかけに
主従黙頭咄し合折も有れ見付に控へ
し侍あはたゞしく走り出我々見付
のお腰かけに控へし所へ桃ノ井若狭
の助家來加古川本藏師直様へ直きに
御目にかゝらん爲早馬にてお屋敷へ
参つたれ共早御登城是非御意得奉ら
んぞ家來も大勢召連れたる体いか
斗ひ申さんやと聞くより件内願ぎ出
し今日御用の有師直様へ直きに對面

こは推參也某直談ぞ走り行を待て
件内仔細は知れた一昨日鶴ヶ岡
にての意趣ばらし我手を出さず本藏
めに言いつ付け此師直が威光の鼻をひ
しがん爲ハ、件内ぬかるな七ツ
にはまだ間もあらんこれへ呼び出せ
仕廻てくれん成程、家來共氣を配
れ主従刀の目釘をしめし手ぐすね
引て待ちかけ居る詞に隨ひ加古川本
藏衣紋繕ひ悠々ぞ打ち通り下部に持
せし進物共師直が目通りに並べさせ
遙下つて躡りハハ憚りながら師直
様へ申し上げ奉る此度主人若狭之
助尊氏將軍より御大役付られ下さ
る段武士の面目身に餘る仕合若輩の
若狭之助何んの作法も覺束なくしか
いあらんと存る所に師直様萬事御師
範を遊ばされ諸事を御引廻し下され

候段首尾能御用相勤るも全く主人が
手柄にあらす皆師直様の御執成さ主
人を始め奥方一家中我々迄も大慶此
上や候べき去るによつて近頃些少の
至りに候へ共右御禮の爲一家中より
の送りもお受遊ばされ下さらば生
前の面目一入願ひ奉る即ち目録御
取次と件内に指し出せばふしぎそふに
そつと取り押開き目録一つ巻物三十
本黄金三十枚若狭之助奥方一つ黄金
二十枚家老加古川本藏同十枚番頭同
十枚侍、中右の通りと讀上ぐれば師
直は明いた口ふさかかれもせずつと
り主従顔を見合せて氣拔けの様に
きよるりつと祭の延た六月の晦日な
見るがごとくにて手持不沙汰に見へ
にける。俄に詞改めて是は、
悼入たる仕合、件内こりやごふ

した物ハテ扱てハアお辭宜申さばお
 志しに背くさいひ第一は大きな不
 禮、エー、式作法を教るもこんな折
 にはさんごこまるナニものぢやハイ
 ヤハヤ本藏殿何の師範致す程の事も
 ないがさかくマア若狹之助殿は器用
 者師範の拙者及ばぬくコリヤ件内
 進物共皆々取納めエー不行儀な途中
 でお茶さへ得進んぜぬさ手の裏返す
 あいさつに本藏が胸算用してやつた
 りと猶も手をつき最早七ツの刻限早
 やお暇殊に今日は猶公の御座敷彌
 主人の儀御引廻し頼み存るさ立んと
 する秋を控へハテゑいかいの貴殿も
 今日この御座敷の座並拜見なされぬか
 イヤ陪臣の某御前の恐れ大事な
 く此師直も同道するに誰おぐづこ
 いふ者かい殊にまた若狹之助殿も何

それかそれ小用の有物ひらにくこ
 進められ然らば御供仕らん御意を
 背くは却て不禮先づおさきへご後に
 付き金で面はる算用に主人の命も買
 ふて取る二天作十露盤のけたを違
 へぬ白鼠、忠義忠臣忠孝の道は一と
 筋眞直に打連れ御門に入にける。程
 も有らさず入り来るは搦谷判官高定
 是も家來を残り置き乗物道に立てさ
 せ譜代の侍早野勘平、朽葉小紋の
 新袴さばくさばつ御門前搦谷判
 官高定登城成りさ音ひける。門番
 罷り出先き程桃井様御登城遊ばされ
 御尋、只今又師直様御越しにて御尋
 早御入と相述るナニ勘平最早皆々御
 入さや遅なかりし残念さ勘平一人御
 供にて御前へこそは急ぎ行奥の御殿
 は御馳走の連誦の聲播磨かた、高砂

の浦に着にけりくうたふ聲々門外
 へ風が持てくる柳かげ其柳より風俗
 はまけぬ所體の十八九松の緑のほそ
 眉もかたい屋敷に物馴しきごく帽子
 の後帯供の奴が提灯は搦谷が家の紋
 所御門前に立休らひコレ奴殿やがて
 もふ夜も明けるこなた衆は門内へは
 叶はぬ爰からいんで休んでやこ詞に
 隨ひナイくご供の下部は歸りける
 内を覗いて勘平殿は何してぞごふぞ
 逢ひたい用が有るさ見廻はす折から
 後かげちらさ見付けおかるじやない
 か勘平様逢たかつたによふこそく
 ム、合點の行ぬ夜中さいひ供をも連
 す只一人さいいなあ、爰迄送りし供の
 奴は先へ歸した。わし獨り残りしは
 奥様からの御使ごふぞ勘平に逢て此
 文箱判官様のお手に渡しお慮外なが

ら此返歌をお前のお手から直きに師
直様へお渡しなされ下さりませと傳
へよ併しお取込の中間違ふまい物とな
しマア今宵はよしにせふぞのお詞わ
たしはお前に逢いたい望何の此歌の
一首や二首お届なさるゝ程の間のな
い事は有るまいさつい一走りに走つ
てきたア、しんどやと吐息つく然ら
ば此文箱旦那の手から師直様へ渡せ
ばよいじや迄ざりや渡してこふ待つ
て居いさいふ中に門内より勘平く
く判官様が召しまする勘平くくハ
イハイく只今それへエ、せはしな
いさ袖ふり切つて行後へ鱈ふむ足
付き驚坂伴内なんぞおかる戀の智恵
は又格別勘平めさせくつて居る所

を勘平くく旦那がお召さ呼んだはき
つかく師直様もそもじに頼みた
い事もあるさおつしやる我等はそな
たにたつた一度君よくご抱付くを
突飛しコレみだらな事遊ばすな式作
法のお家に居ながら狼藉千萬あた不
作法なあた不行儀さつき退ればそれ
は難面くらがり紛れについちよこ
くご手を取争ふ其中に伴内様く
師直様の急御用伴内様くご奴二人
がうるく目玉でこれはしたり伴内
様最前から師直様が御尋れ式作法の
お家に居ながら女を捕へあた不行儀
なあた不作法さ下部が口々エ一同じ
様に何ぬかす頼ふくらしで連れ立
行。勘平後へ入かはり何んぞ今のは

たらき見たか伴内めが一つばいくら
ふてうせおつた。おれおきて旦那が
呼ばしやるさ言ふさおけ古いさぬか
すが面倒さに、奴共に酒呑せ古いさ
言はさぬ此術ハ、ハ、ハ、まんまご首
尾は仕課たサア其首尾序になちよつ
さくご手を取ればハテ扱はづんだ
マアまちやいの。何いはんすやら何
の待事も有ぞいなア、もふ頓て夜が
明けるわいな、せひにくにせひな
くも下地は好なり御意はよし。それ
でも爰は人出入奥は騒の聲高砂せう
こんによつてこしをすればアノ騒で
思ひ付たイザこしかけてご手を引合
打連れて行。

殿中及傷の段

切 竹本 大隅 太夫

鶴 澤 道 八

(床本) 殿中及傷の段

脇能過て御樂屋に鼓の調へ太鼓の音
 天下泰平繁晶の壽祝ふ直義公御機
 嫌斜ならざりける。若狹之助は兼て
 待つ師直運しと御殿の内奥を窺ふ長
 袴の紐しめくもり氣配し儕師直眞ッ
 二つと刀の鯉口息を詰め待つ共知ら
 ぬ師直主従遠目に見付け是はく若
 狹之助殿扱々お早い御登城イヤハヤ
 家折りました。我等閉口くイヤ閉
 口序に貴殿に言譯致しお詫申事が有
 ると兩腰ぐばらりと投出し若狹之助
 殿改めて申さればならぬ一通り日外
 鶴ヶ岡で拙者が申した過言チお腹
 が立つたて有るふ尤じやがそこを
 お詫、其時はごふやらした詞の間違

ひてつい申だ我等一生の寵忽武士が
 コレ手をさげる眞びらく假令其元
 が物馴れたお人なりやこそ外々の狼
 藉者で見さつしやれ。此師直眞ッ二
 つこはやく有やうが其節貴殿の後
 かげ手を合して拜ましたアハハア
 一年寄るこやくたいく年にめんじ
 て御免くコレサく武士が刀を投
 げ出し手を合す。是程に申すのを聞
 入れぬ貴公でもないはさ。さかく幾
 重にも誤りく件内さくにお詫
 ぐと金が言はする追跡さく夢にも
 しらぬ若狹之助力きみし腕も拍子抜
 今さら抜に抜かれもせず寢及合はせ
 し刀の手前さしうつむきし思案顔小
 柴のかげには本蔵が臉もせずまも
 り居る、ナニ件内此搦谷はなげ遅い

人形

桃井若狹之助 吉田扇太郎
 高野師直 桐竹門造
 茶道珍才 吉田玉徳
 搦谷判官 吉田玉松
 加古川本蔵 吉田玉次郎

若狹之助殿さばきつい違ひ扱々不行儀者、今において煩出しせぬ主が主なれば家老で候進諸事に細心のつくやつが一人もないイザ／＼若狹之助殿御前へ御供致そうサアお立ちなされ、サアサア師直め誤つておるぞコリヤ爰な酢め／＼粹様めイヤ若狹之助殿前からちさ心悪ふござるマア先へ何さした／＼腹痛かコレサ件内お春／＼お薬進じよかなイヤ／＼それ程にもござらぬ然らば少しの内お寛御前の首尾は我等がよい様に申し上る。件内一間へお供申せ、ご主従寄つてお輩に迷惑ながら若狹之助ははと思へご是非なくも奥の一間へ入りければア、もふ樂じやと本藏は天を拜し地を拜しお次の間にぞ控へ居る。程もあらさず壘谷判官御前

へ通る長廊下師直呼びかけ遅し／＼何と心得てござる、今日ば正七ツ時ご先刻から申し渡したでないか成程遅なかりしは不調法、去りながら御前へ出るはまた間もあらんご、秋より文箱取出し最前手前の家來が貴公へお渡し申くれよ、即奥かほよ方より参りしと渡せば受取成程／＼イヤ其元の御内室は扱々心懸かござるは手前が和歌の道に心を寄するを聞き添削を頼むと有る定て其事ならんご押開きさなきだにおもきか上のさよ衣我つまならぬつまな重れそハア是は新古今の歌此古歌に添削とはム／＼ご思案の内我戀の叶はぬ證扱は夫に打ち明しと思ふ怒をさあらぬ顔判官殿此歌御らふじたでござらふイヤ只今見ましたム、手前も讀のを

いかに、アノ貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよつと道はさるゝ歌が是じや、つまならぬつまな重れそア、貞女／＼ア、其元はあやかり者登城も遅なかる筈の事、内に斗りへばり付てござるによつて御前の方はお構ないじやご當こする雜言過言あちらの喧嘩の門違ひご判官さらに合點行かすむつごせしむ押しづめハ、ハ、ハ、コレハ／＼師直殿には御酒機嫌か、御酒参つたの、いつもらしやつた、イヤいつ呑ました御酒下されても呑いでも勤る所はきつご勤る、貴公はなげ遅かつたの御酒参つたか、イヤ内にへばり付いてござつたか、貴殿より若狹之助殿ア、格別勤られます、イヤ又其元の奥方は貞女といひ御器量ご申手跡は見事御自

慢なされむつさなされなうそはない
 はさ、今日御前にはお取込み手前連
 も同前、其中へ鼻毛らしいイヤはは
 てまえ、奥が歌でござる。それ程内が
 手前が奥が歌でござる。それ程内が
 大切なら御出御無用惣体貴様のやう
 な内に斗り居る者を井戸の鮎ださい
 ふ諭が有、これや後學のため聞て置
 かしやい、彼の鮎めがわづか三尺か
 四尺の井の中を天にも地にもない様
 に思ふて不斷外を見る事がない所に
 彼井戸がへに釣瓶に付てあひります
 それを川へ放しやるさ何が内に斗り
 居るやつじやによつて、悦んで途を
 失ひ彼方の橋板では鼻柱をびしやり
 又此方の橋板では鼻柱をびしやりに
 びりくくくく死にまするサ彼
 の鮎めが鮎が貴様が貴様が鮎が鮎よ
 く貴様も丁ど鮎と同じ事ハハハハ

鮎だくく鮎士だウさ出ほうだい
 判官腹にすへかれこりやこなた狂氣
 めさつたかイヤ氣が違ふたか師直ム
 ヤこいつ武士を捕へて氣違ひこは出
 頭第一武藏守高野師直ムすりや先
 方よりの悪言はおみや本性よな、く
 ざいん又本性なりやごぶするチ
 かうするさ抜討ちにまつこうへ切り
 付くる眉間の大疵是はさ怯む身のか
 はし烏帽子の頭二つに切り又切りか
 いるを抜けつুকッりつ逃廻る折りも
 有れお次に控へし本藏走出て押しこ
 ゃめコレ判官様御短慮と抱さむる其
 隙に師直は館をさしてこけつ轉びつ
 逃行けば儂れ師直眞二つ放せ本藏放
 しやれさせり合内館も俄に騒出し家
 中の諸武士大小名押へて刀もぎ取る
 やら師直を介抱やら上を下へこ、

(床本) 裏門の段

立騒ぐ表御門裏御門兩方打たる館の
 騒動提灯ひらめく大騒ぎ早野勘平う
 ろく眼走歸つて裏御門砕けよ破よ
 さ打た、き大聲上壘谷判官の御内早
 野勘平主人の安否心もさなし愛明け
 てたへ早くくく呼はつたり門内よ
 りも聲高に御用有らば表へ廻れ爰は
 裏門成る程裏門合點表御門は家中の
 大勢早馬にて寄付かれず喧嘩の様子
 は何んこく喧嘩の次第相濟んだ出
 つ頭の師直様へ慮外致せし科によつ
 て壘谷判官は閉門仰せ付けられ網乗
 物にてたつた今歸られしと聞くより
 ハアなむ三寶おやしきへさ走りか
 つてイヤくく閉門ならば館へは
 猶歸られじと行きつ戻りつ思案最中

裏門の段

竹野鶴竹 鶴野鶴竹
本澤本澤 本澤本澤
綱右衛門 吉源吉源
太左衛門 友路友路
夫左衛門 衛太衛太
市門夫

人形

早野勘平 吉田榮三
腰元おかる 吉田文五郎
鷺坂伴内 吉田扇太郎

腰元おかる道にてはぐれヤア勘平殿
様子は残らず聞きました。コリヤ何
んさせふごふせふさ取付き歎くを取
て突退エーめるくさほへ頼コリヤ
勘平が武士は捨つたはやいもふは迄
さ刀の柄コレ待つてくだされコリヤ
狼狽てか勘平待チうるたへた是が
狼狽すに居られふか主人一生懸命の
場にも有合はさす剩へ囚人同然の
網乗物お屋敷は閉門其家來は色にふ
けり御供にはすれし人の中へ兩腰さ
して出られふか爰を放せマ、待
つて下さんせ尤じや道理ぢやむそ
のうろたへ武士には誰がした。皆わ
しが心から死ぬる道ならお前より私
が先へ死なればならぬ今お前が死ん
だらば誰が侍じやと譽まする。爰
をさつくりと聞譯けて私が親里へま

づきて下さんせさ、様もか、様も在
所でこそあれ頼もしい人もふかう成
た因果ぢやと思ふて女房のいふ事も
聞いて下され勘平殿さわつと斗りに
泣しづむ、そふじやもつこもそちは
新參なれば委細の事は得しるまい。
お家の執權大星由良之助殿いまだ本
國より歸られず歸國を待つてお詫び
せんサア一時なり共急がんと身拵へ
する所へ鷺坂伴内家來引連れかけ出
ヤア勘平うぬが主人判官師直様へ感
外を働きかすり疵負せし科によつて
屋敷は閉門追付け首が飛は知れた事
サア腕廻せつれ歸つてなぶり切りか
くがひろげさひしめけばよい所へ鷺
坂伴内内齊れ一羽で喰ひたらねど勘平
が腕の細れぶか料理搦櫛くふて見よ
イヤ物ないはずな家來共畏まつたさ

扇ヶ谷の段

切 豊竹古靱太夫

鶴澤清六

人形

- 壺谷判官 吉田玉松
- 顔世御前 桐竹紋十郎
- 大星力彌 桐竹紋太郎
- 原郷右衛門 吉田小兵吉
- 斧九太夫 吉田玉七
- 石堂馬之丞 吉田玉幸
- 薬師寺次郎左衛門 吉田玉市
- 大星由良之助 吉田榮三
- 諸士 大勢

兩方より捕つたさかゝるをまつかせ
 さかいくかり兩手に兩腕捻じ上げつ
 しくご蹴かへせばかはつて切り込
 む切つ先を刀の鞘にて丁ごうけ追つ
 てくるを襦袢柄にてのつけにそらし
 四人一所に切りかゝるを右さ左りへ
 一時に田樂返しにばた／＼と打
 ちすへられ皆々ちり／＼に行く後へ
 件内いらつて切りかゝる立げづしそ
 つ首握り大地へごうごもんどり打た
 せしつかご踏付けサアごうせふご
 つちの儘突ふか切らふかなぶり殺し
 ご振上げる刀に纏つてコレ／＼そいつ
 殺すごお詫の邪魔もふよいわいなご
 留る間に足の下をばごそ／＼尻に
 尾のない鷲坂は命から／＼逃て行く
 エ、残念／＼去りながらきやつをば
 らさば不忠の不忠一先づ夫婦が身を

隠し時節を待つて願ふて見ん最早明
 け六ツ東がしらむ横雲にれぐらを離
 れ飛からすかはい／＼の女夫づれ道
 は急げご後へ引く主人の御身いか
 ぞご案じ行こそ浮世なれ……。

(床本) 扇ヶ谷の段

壺谷判官閑居によつて扇ヶ谷の上屋
 敷大竹にて門戸を閉家中の外は出入
 をごいめ事殿重に見へにけりかゝる
 折にも花やかに奥は媚く女中の遊び
 御臺所かほよ御前お傍には大星力彌
 殿の御氣を慰めんご鎌倉山の八重九
 重色々櫻花籠に生らるゝ花よりも生
 る人こそ花紅葉柳の間の廊下を傳ひ
 諸士頭原郷右衛門後に續いて斧九太
 夫是は／＼力彌殿早い御出仕イヤ某
 も本國より親共が參る迄晝夜相詰め

罷り有るそれは御奇特千萬さ郷右衛門
兩手をつき今日殿の御機嫌はいか
いお渡り遊ばさるゝと申し上げれば
かほよ御前チ二人共太儀く此度
は判官様お氣詰りに思し召おしつら
ひでも出よふかご案じたさは格別明
暮葉山の花さかり御らふじて御機嫌
のよいお顔ばせ夫故に自もお慰に指
上げふご名有る標を取寄せて見やる
通りの花拵へアゝいか様にも仰せの
通り花は開く物なれば御門も開き閉
門を御赦さるゝ吉事の御趣向拙者も
何かなご存すれごかやうな事の思ひ
付きは無調法なる郷右衛門ヤア肝心
の事申し上ん今日御上使のお出さ承
はりしが定めて殿の御閉門を御赦さ
るゝ御上使ならん何んご九太夫殿そ
ふは思し召されぬかハハハハコレ

郷右衛門殿此花さいふ物も當分人の
目を悦ばす斗り風が吹けば散り失る
こなたの詞もまづ其如く人の心を悦
ばさふ速武士に似合はぬゝらりくら
りと後からはげる正月詞なごおい
やれ此度殿の御越度は響應の御役儀
を蒙りながら執事たる人に手を買せ
館を騒せし科輕ふて流罪重ふて切腹
じたい又師直公に敵對は殿の御不覺
ご聞きもあへず郷右衛門扱は其方殿
の流罪切腹を願はるゝかイヤ願ひは
致されご詞をかざらず眞實を申のじ
やもごをいへば郷右衛門殿こなたの
格惜しはざからおこつた事金銀を以
て煩をばり召さるればか様な事は出
來申さぬご己が心に引當てゝ慾面打
けす郷右衛門人に媚詔ふば侍でない
武士でないナフ力彌殿何んごそふで

は有るまいかご詞の角をなだむる御
臺二人共に争ひ無用今度夫の御難儀
なさるゝ元の發りは此かほよ日外鶴
ケ岡で響應の折から道知らずの師直
主の有る自に無体な戀をいひかけさ
まゝくごごきしが恥をあたへ懲さ
せんご判官様にもしらす歌の點に
事寄さよ衣の歌を書き恥しめてやつ
たれば戀の叶はぬ意趣ばらしに判官
様に悪口元より短氣なお生れ付得堪
忍なされぬはご道理でないかいのこ
語り賜へば郷右衛門力彌も俱に御主
君の御憤りを察し入心外面に現はせ
り早御上使の御出さ玄關廣間ひしめ
けば奥へかくご通じさせ御臺所も座
を下り三人出向ふ間もなく入來る上
使は石堂右馬の壺師直が昵近薬師寺
治郎左衛門役目なれば罷り通るご會

釋もなく上座に着けば一間の内より
 鹽谷判官しづく立出是はく御
 上使と有て石堂殿御苦勞千萬先づお
 盃を用意せよ御上使の趣承ばりい
 づれもこ一ツ献酌積うつを晴し申さ
 んチーそれよふござる薬師寺もお聞
 致さふ。したが上意を聞かれたか酒
 も咽喉へは通るまいさあざ笑へば右
 馬之返我々今日上使に立つたる其趣
 具に承知せられよと懷中より御書取
 出し押ひらけば判官も席をあらため
 承る其文言此度鹽谷判官高定私の
 宿首をもつて執事高師直を及傷に及
 び箱を懸せし科によつて國郡を没收
 し切腹申し付ける者なけ。聞よりは
 つと驚く御臺並居る諸士と顔見合せ
 斬れ果たる斗りなり判官動する氣色
 もなく御上意の趣き委細承知仕る扱

これからは各の御苦勞休めに打ちく
 つろいで御酒一つコレく判官だま
 り召され其方む今度の科はしげり首
 にも及ぶべき所お上の慈悲を以て切
 腹仰付けらるゝを有りがたふ思ひ早
 速用意もすべき筈殊に以て切腹には
 定つた法の有る物それに何んぞや當
 世様の長羽織をせらくこしらるゝ
 は酒興か但し血迷ふたか上使に立つ
 たる石堂殿此薬師寺へ不作法ときめ
 つくればにつここ笑ひ此判官酒興も
 せず血迷もせぬ今日上使と聞くより
 も斯あらんご期したるゆへ兼ての覺
 悟見すべしご大小羽織を脱捨てれば下
 には用意の白小袖無紋の上下死装束
 皆々是はと驚けば薬師寺は言句も出
 ず顔ふくらして閉口す。右馬之返さ
 しよつて御心底察し入則ち拙者檢使

の役心しづかに御覺悟ア御深切忝
 なしそも及傷に及びしより斯あらん
 ご兼ての覺悟アうらむらくば箱にて
 加古川本藏に抱き留られ師直を討も
 らし無念骨髄に通つて忘れがたし湊
 川にて楠正成最期の一念によつて
 生を引くさいひし如く生ればかり死
 かはり鬱憤を晴らさんと怒りの聲さ
 諸共にお次の襖打ちたゝき一家中の
 者共殿の御存生に御尊顔を拜したき
 願ひ御前へ推參致さんや郷右衛門殿
 お取次ご家中の聲に聞ゆれば郷右衛
 門御前に向ひいかゞはからひ候はん
 フウ尤なる願ひなれ共由真之助が參
 る迄無用くはつこ斗り一間に向ひ
 聞かるゝ通りの御意なれば一人も叶
 わぬく諸士は返す詞もなく一間も
 ひつそさしづまりける。力彌御意を

霞ヶ關の段

豊竹綾太夫
豊澤廣太郎

人形

大星由良之助 吉田榮三
原郷右衛門 吉田小兵吉
大星力彌 桐竹紋太郎
諸士 大勢

へ入にける。御臺はわつと聲を上扱もく武士の身の上程悲しい物の有るべきか今夫の御最期にいたいたい事は山々なれど未練なご御上使のさげしみが恥かしさに今迄こらへて居たはいのいさをしの有様やご亡骸に拖き付前後もわかず泣賜ふ力彌參れ御臺所諸共亡君の御骸を御菩提所光明寺へ早々送り奉れ由良之助も後より追付き葬々の規式取り行はん堀矢間小寺間其外の一家中道のけいご致されよと詞の下より御乗物手舁にかきすへ戸を開き皆立ち寄つて御死骸涙と俱に乗せ奉りしづゝごかき上ぐれば御臺所は正体なく歎き賜ふを慰めて諸士のめんく我れ一と御乗物に引添く御菩提。

(床本) 霞ヶ關の段
御骸送り奉り力彌矢間堀、小寺追々に馳歸り扱は屋敷をお渡し有たか此うへは直義の討手を引受け討死せんまはやり立てば由良之助イヤく今死すべき所にあらず是を見よ旁々亡君の御篋を抜き放し此きつさきには我君の御血をあやし御無念の魂を残されし九寸五分此刀にて師直が首かき切つて本意をまげん實尤も諸武士の勇屋敷の内には薬師寺次郎左衛門の貫の木はつしと立てさせ師直公の罰が當り扱いざまくご家來一度に手を叩きごつと笑ふ鯨のこえアレ聞かれよと若侍取返すを由良之助先君の御憤り暗さんと思

二ツ玉の段

竹本文字大夫

野澤勝平

胡 鶴澤福太郎

鶴澤友駒

弓 野澤勝芳

人形

獵人 勘平 吉田榮三

斧 定九郎 吉田玉幸

百姓 奥市兵衛 桐竹門造

ふ所存はないか、はつと一度に立出
しお思へば無念と館の内をふりかへ
りくはつたと睨んで立出る。

(床本) 二ツ玉の段

急ぎ行く又もふりくる雨のあし人の
足音とぼく道は闇路に迷はれど
子故の闇につく杖もすぐ成る心堅親
仁一筋道の後ろからチーイ親仁
殿よい道づれと叫ばつて斧九大夫
が悴定九郎身の置き所しら浪や此街
道の夜働きたんびら物を落しざし
つきにから呼ぶ聲が貴様の耳へはい
らぬか此ぶつそな街道をよい年を
して大膽く連にならふさ向ふへ廻
りきよる付く目玉ぞつこせしが遠は
老人ははくお若いに似ぬ御奇特な
私もよい年をして一人旅はいやなれ

どサアいづくの浦でも金程大切なも
のはない去年の年貢につまり此中か
ら一家中の在所へ無心に居たれば是
もびたひらなり才覚ならず埒のあか
ぬ所に長居はならずすこく一人戻
る道と半分言はさすヤヤかましいあ
り様が年貢の納まらぬ其相談を聞き
にはこのコレ親仁殿おれが言ふ事を
さくさ聞かしゃれやアいかうじやは
こなたの懐ろに金なら四五拾兩のか
さ縞の財布に有るのをさつくりさ見
付けてきたのじや借して下だされ男
が手を合はす定めて貴様も何んぞ詰
らぬこさか子が難儀に及ぶによつて
さ言ふ様な有る格な事じや有うけれ
どおれが見込んだらハテしよ事かな
いと諦めて借て下されく懐へ手
を指入引きすり出す縞の財布ア一申

しそれはくさは是程爰に有る物さ
 ひつたくる手にすがり付きイエ〜
 此財布は後の在所で草鞋買ふ逆端銭
 を出しましたが後に残るは晝食の握
 り飯くばく亂せんようにご娘かくれ
 た和中散反魂丹でございますお赦し
 なされて下さりませさひつたくり逃
 げ行く先きへ立ち廻りエー聞き分の
 ないむごい料理するがいやさに手ぬ
 るふいへば付き上がるサア其金爰へ
 まき出せ遅いさつた一討と二尺八
 寸おがみうちなふ悲しやさいふ間も
 なくから竹ばりさ切り付くる刀の廻
 りか手の廻りかばづれる抜き身を兩
 手にしつかさ掴み付きごふでもこな
 た殺さしやるのチ、知れた事金の有
 るのを見てするしごさこいさばかす
 さくたばれと肝先へさし付くればマ

い、い、い、まあ待つて下さりませハア
 せひに及ばぬ成程〜是は金でござ
 りますけれ共此金は私がたゝつ一人
 の娘がござる其娘が命にもかへぬ大
 事の男がござりまする其男のために
 入る金ちと譯有る事ゆへ浪人して居
 まする娘が申しますすにはあのお人の
 浪人も元はわしゆへ何ぞぞして元の
 武士にしてしんぜたい〜ご嫌さわ
 しこへ毎夜さ頼みア、身賃にはござ
 りまするごうもしがくの仕様もなく
 ばいさいる〜談合して娠にも呑込
 ませ舞へは必ず沙汰なしとしめし合
 はせほんに〜親子三人が血の涙の
 流れる金それをお前に取られて娠は
 何んさなりませふコレ拜みます助け
 て下さりませおまへもお侍の果そふ
 なが武士は相身互ひ此金がなければ

娠も舞も人様に顔が出されぬたつた
 一人の娘につれそふ舞ぢや者不便に
 ござる可愛ござる了簡してお助け
 なされて下さりませエ、お前はお
 若いによつてまだお子もござるまい
 がやんがつてお子を持つて御らうじ
 ませ親仁がいとおつたは尤じやま
 思し召して此場を助さしやつて下さ
 りませ、マア一里行ば私が在所金を
 舞に渡してから殺されましょ申し〜
 娠が悦ぶ顔見てから死たうござりま
 すこれ申ア、あれ〜〜と呼はれ
 ござ後先き遠く山びこの旣に哀れ催せ
 りチ、悲しいこつちやはまつと〜こ
 ぼへヤイ老ばれれ其金でおれが出世
 すりや其めぐみでうぬがせがれも出
 世するはやい人に慈悲すりやわるふ
 はむくはぬア、可愛やごつごつつく

身賣りの段

豊竹駒太夫
鶴澤重造

人形

百姓與市兵衛女房 吉田玉七
娘おかる 吉田文五郎
一文字屋才兵衛 吉田文作
早野勘平 吉田榮三

うんこ手足の七轉八倒のたくり廻る
をすねにて蹴かへしチーいさしやい
たかろければおれに恨みはないぞや
金がありやこそ殺せ金かなければや
んのいの金がつたきじやいさしほや
南無阿彌陀南無妙法蓮華經ごちらへ
なりさうせおろさ刀も抜かぬいもさ
しゑぐり草葉も朱に置くつゆや年も
六十四苦八苦あへなく息は絶にけり
しすましたりさ件の財布くらがり耳
のつかみ讀ヒヤ五拾兩エー久しぶり
の御對面添しと首にひつかけ死骸
をすぐに谷底へはれこみ蹴込ごるま
ぶればれば我が身にかゝるさもしら
す立つたるうしろよりいつさんにく
る手負猪これはならぬさ身をよぎる
かけくる猪は一文字木の根岩角ふみ
立て蹴たて鼻いからして泥も草木も

一まくり飛行けばあはや見送る
定九郎が脊ほねをかけてごつさりさ
あばらへぬける二ツ玉うん共ぎやつ
共いふ間もなくふすばり返りて死た
るは心地よくこそ見へにけれ猪打ち
さめしと勘平は鐵砲ひつさげ爰かし
こさぐり廻りて扱こそ引立れば猪
にはあらずヤア／＼こりや人ぢやな
む三寶仕損じたりと思へどくらさ眞
の闇誰人なるぞと問れもせずまだ息
あらんと抱起せば手に當る金財布つ
かんで見れば四五拾兩天のあたへさ
押しいたゞきん／＼猪より先きへ逸散
に飛がごさくに急ぎける。

(床本) 身賣りの段

みさき踊りがしゆんだる程に親仁出
て見やば／＼んつば／＼んつれて親仁出

て見やばいんつ 夢かつ音の在所歌所
 も名におふ山崎の小百姓與市兵衛が
 殖生の住家今は早野勤平も浪々の身
 の隠れ里女房おかるは寝亂れし髪取
 り上人ご櫛箱のあかつきかけて戻ら
 ぬ夫待つ間もさけし投島田結ぶにい
 ばれぬ身の上を誰にかつげの水櫛に
 髪の色艶すきかへししなよくしやん
 と結立てしは在所におしき姿なり母
 の齡も杖つきの野道さぼく立歸り
 チゝ娘髪結やつたか美しうよふ出来
 たイヤもう在所はごともかも 夢秋時
 分ていそがしい今も敷際で若い衆が
 夢かつ歌に親仁出て見やばいんつれ
 てご謡ふを聞き親父殿の遅いが氣に
 かゝり在口迄往たれごようなふ影も
 かたちも見へぬさいなこれやまあご
 ふして遅い事じやわし一走り見て來

やんしよイヤなふ若い女の一人ある
 くはいらぬ事殊にそなたはちいさい
 時から在所をあるく事さへ嫌ひで搦
 谷様へ御奉公にやつたれごいふでも
 草深い所に縁が有るやら戻りやつた
 が勤平殿ご二人居やればおさましい
 顔も出ぬチゝかゝ様のそりや知れた
 事すいた男ご添のぢやもの 在所はお
 ろか貧しいくらしても苦にならぬや
 んがて盆に成つてごさま出て見やか
 んつかゝんつれてさいふ歌の通り
 勤平殿ごたつた二人踊見にいきやん
 しま、お前も若い時覺があるごさし
 合いくらぬぐはら娘氣もわさくご
 見へにける。何ぼ其やうに面白おか
 しいやつても心の中はのイエく
 濟でござんすぬしのために祇園町へ
 勤奉公に行くは兼て覺悟の前なれご

年寄つてごゝ様の世話やかしやんす
 がそりやいやんな少進物なれご兄も
 搦谷の御家來なれば外の世話するや
 うにもないご親子咄しの中道傳ひ駕
 をかゝせて急ぎくるは祇園町の一文
 字やエゝごつご一家二家、ム爰じや
 くご門口から與一兵衛殿内にかご
 言つゝはいれば是はまあく遠い所
 をソレ娘たばご盆お茶上ましやご親
 子して樋でおいへを伯人やの亭主扱
 タアハ是の親仁殿もいかい太儀、別
 條なふ戻られましたかユゝさては親
 父殿ご連立つて來はなされませぬか
 是ははしかりお前へいてから今におい
 てヤア戻られぬかハテめんよふなハ
 アゝもし稻荷前をぶら付て彼玉殿に
 つまゝりやせぬかのコレ中爰へ見
 に来て極た通りお娘の年も丸五年切

給銀は金百兩さらりて手を打つた是の親仁がいはるゝには今夜中に渡さればならぬ金有れば今晚證文を認め百兩の金子お借なされて下され涙をこぼしての頼み故證文の上で半金渡し残り奉公人引かへの契約何が其五拾兩渡す悦んでいたゞきほたゞ言ふて戻られたはも四ツでも有ふかい夜道を一人金持ていらぬ物も留ても聞かす戻られたが但しは道にイエ／＼寄らしやる所はなふか／＼様ない共々殊に一時も早ふそなたやわしに金見せて悦ばさふ逆いきせき戻らしやる筈じやに合點かいかねいヤコレ合點のいゝいかねはそちのせんさくこちはさがりの金渡し奉公人連れていのと懐より金取出し後金の五拾兩これで都同百兩サ

ア渡す請さらしやれエお前それで親仁殿の戻られぬ中はなふかるわがみはやられぬハテぐすゝと埒の明かぬコレぐつ共すつ共言れぬ興一兵衛の印形證文が物いふじやて、コレ證文がけふから金で買切つたから一日違へばれこづ違ふごふで斯せさ濟まいと手を取つて引き立る、マア／＼待てと取付く母親突退無体加退無体に駕へ押込／＼かき上る門の口鐵砲に簀笠打かけもどりがいつて見る勘平つか／＼さ内に入り駕の内なは女房共こりやマアごこへチ、勘平殿よい所へよふ戻つて下さつたご母の悦び其意を得ずごふでも深い譯が有る母者人女房共様子聞かふさお上の真中ごつかさすはれば文字の亭主チ、扱はこなたが奉公人の御亭主じ

やの、たごへ夫でも何んでも言號の夫なご、脇より違亂妨げ申す者無之候と親仁の印形有るからはご中には構はぬ早ふ奉公人を受取るチ、駕殿合點がいくまい兼てこなたに金の入る様子娘の咄して聞た故ごふで調へて進んぜたいといふた斗りで一錢の宛もなしそこで親父殿の言しやるにはひよつさこなたの氣に女房賣つて金調やうさよもと思ふでや有るまいけれどもし二親の手前を遠慮して居やしやるまい物でもないいつそ此與一兵衛が駕殿にしらす娘を賣らふ、まさかの時は切り取りするも侍のならひ女房賣つても恥にはならぬお主の役に立つる金調へておましたらまんざら腹も立まいと昨日から祇園町へ折り極はめにいて今に戻

らしやれぬ故親子案じて居る中へ親方殿が見へて夕ア親父殿に半ん金渡し後金の五拾兩と引がへに娘を連れて逝ふと言てなれど親父殿にあふての上と譯をいふても聞き入れず今連れていなしやる所さふせふぞ勸平殿是はく先づ以つて舅殿の心遣ひ、忝いしたがこちにもちつこよい事が有れ共それは追つて親仁殿も戻られぬに女房共は渡されまい、とばなせに、ハテいはい親なり判が、り尤も夕ア半ん金の五拾兩渡されたでも有ふけれどイヤこれ京大阪を股にかけ女護の嶋ほご奉公人を抱へる一文字屋渡さぬ金を渡したさいふて濟物かいのまだ其うへに慥な事があるてや、これの親仁が彼五拾兩と言ふ金を手ぬぐひにくるくこまいて懐

にいれらるゝ、それやあぶない是に入れて首にかけさつしやれさおれがきて居る此一重物の縞のきれでこしらへた金財布借たればやんがて首にかけて戻られうヤア何んこなたが着てゐる此縞のきれの金財布がチ、てや。あの此縞じや何ぞ慥な證據で有ふが。ま聞くよりはつこ勸平が肝先にひしここたへそばあたりに目をくばり袂の財布見合はせば寸分違はぬ糸入縞、なむ三寶扱は夕ア鐵砲で打ち殺したば身で有つたかハアはつと我胸板を二ツ玉で打ちぬかるゝよりせつなき思ひさほしらすして女房コレこちの人そはくせすさやる物かやらぬ物が分別して下さんせチ、成程ハテもふあの様に慥に言はるゝからはいきやらずば成まいかアノま

つ様に逢ひでもかへ、イヤ親父殿にもげさちよつさあふたが戻りは知れまいコウそんなりやまつさんに逢ふてかへ夫れならそふさいひもせでか、様にもわしにも案じさして斗りさ言ふに文字も圖に乗つて七度尋ねて人うたがへじや親仁の有り所のしれたのでそつちもこつちも心がよいまだ此上にも四の五の有ればいや共んでんご沙汰まあくさりりぞ濟んでめでたいお袋も御亭主も六條参りしてちと寄らしやれサアく駕に早うのりやアイくコレ勸平殿もふ今あつちへ行ぞへ。年寄つた二人の親達ごふでこな様のみんな世話取けてまつ様はきつい持病、氣を付けて下さんせま親の死目を露しらす願ふ便さいちらしき、いつそ打ち明け有り

勘平切腹の段

切 竹本土佐太夫

野澤吉兵衛

人形

與市兵衛 女房 吉田 玉七

早野勘平 吉田 榮三

めつぼう彌八 吉田 文之助

種ヶ島の六 吉田 文二郎

狸の角兵衛 吉田 瓢毒呂

原郷右衛門 吉田 小兵吉

千崎彌五郎 桐竹 政龜

のまゝ、咄さんにも他人有りさ心を痛

めこたへ居るチ舞殿夫婦の別れ暇

乞ふしたかるけれどそなたに未練な

氣も出よかと思ふての事て有るイエ

何んば別れても主のために身を

賣れば悲しうも何共ないわしやいさ

んで行くかゝ様したがさゝ様に逢ず

に行くのがチイそれも戻らしやつた

らついでにいかしやるぞいの煩げぬ

様に灸すへて息才な顔見せにきてた

も鼻紙屏もなければ不自由な何んに

もよいか、さば付いてけが仕やんな

さ駕に乗まで心を付けさらばやさら

ば何の因果で人並な娘を持ち此悲し

いめを見る事じやさ齒をくひしげり

泣きければ娘は駕にしがみ付き泣を

しらすじ聞かさじさ聲をも立てすむ

せかへる。なさげなくも駕かきあげ

道をはやめて急ぎ行く。

(床本) 勘平切腹の段

母は後を見送り／＼ア、よしな事

いふて娘も嘸悲しかるチいな人わ

いの親の身でさへ思ひ切りがよいに

女房の事ぐづ／＼思ふて煩ふて下さ

んな此親父殿はまだ戻らしやれぬ事

かいのふこなたあふたさ言はしやつ

たのア、成程そりやまあごころであ

はしやつて何所へ別れていかしやつ

た、されば別れた其所は鳥羽か伏見

か淀竹田さ口から出次第めつぼう彌

八種が島の六、狸の角兵衛所の狩人

三人連れ親父の死骸に襲打ちさせて

戸板にのせどや／＼さ内に入り、夜

山仕舞て戻りがけ是の親父が殺され

て居られた故狩人仲間も連れて来た

と聞よりはつと驚く母、何者の仕業
 コレ舞殿殺したやつは何者じや敵を
 取てくだされのふコレ親父殿へ
 よべごさげべご其かひも泣より外の
 事ぞなき狩人共口々にお袋悲しかる
 代官所へ願ふて詮議してもらはしや
 れ笑止くそ打つれて皆は我家へ立
 歸る。母は涙の隙よりも勘平が傍へ
 差よつて、コレ舞殿よもやくくく
 くこは思へ共合點がいかぬ何んぼ
 以前が武士じやさて舅の死目見やし
 やつたら悔りも仕やるはづ、こなた
 道であふた時金受取はさつしやれぬ
 か、親父殿がなんと言れた、サアい
 はつしやれサア何とごふも返事は有
 るまいがない證據はコレ愛にさ勘
 平が懐へ手を指入れて引出すはさ
 つきにちらりさ見て置た此財布コレ

血の付いて有るからはこなたが親父
 を殺したのイヤそれはくこはエ、
 わごりよはなに隠しても隠くされぬ
 天道様が明らかかな。親父殿を殺して
 取た其金にや誰にやる金ちやム、聞
 へた。身貧な舅むすめ賣つた其金を
 中で半分くすれて置いて皆やるまいか
 ご思ふてコリヤ殺して取つたのじ
 やな、今さいふ今迄も律義な人じや
 ご思ふてだまされたが腹が立はいや
 いエ、愛な人でなし、あんまりあき
 れて涙さへ出ぬわいやいなふいこし
 や與一兵衛殿畜生のやうな舞さば知
 らすごふぞ元の侍に仕てやりたい
 ご年寄て夜も寝ずに京三界をかけあ
 るき彌財を投打つて世話さしやつた
 も返つてこなたの身のあださ成つた
 るか飼かふ犬に手を喰るゝごよふも

く此やうにむごたらしう殺された
 事ぢや迄コリヤ愛な鬼よ蛇よごさま
 をかへせ親父殿を生けて戻せやいご
 遠慮會釋もあら男のたぶさをつかん
 て引寄くたいき付づだんに切り
 さいなんだ逆是で何の腹が居よさ恨
 の數々くごき立てかつげごふして泣
 ゐたる身の誤りに勘平も五體に熱湯
 の汗を流し疊にくひ付き天罰と思ひ
 知つたる折こそあれ、深編笠の侍
 二人早野勘平在宿をしめさるゝか、
 原郷右衛門千崎彌五郎御意得たしご
 音なへば折悪けれ共勘平は腰ふさぎ
 脇袂で出迎ひコレへ、御兩所共に
 見ぐるしき壇生へ御出忝しご頭を
 さぐれば郷右衛門見れば家内に取込
 みも有りそふなイヤもふ些細な内證
 事、おかまいなく共いざ先あれへ、

然らば左様に致さんさすつこ通り座に付けば二人が前に兩手をつき此度殿の御大事にはづれたるは拙者が重々の誤り申ひらかん詞もなし、何卒某が科御ゆるしを蒙り亡君の御年忌諸家中諸共相勤る様に御兩所の御執成偏に頼み奉るご身をへりくだり逃ければ郷右衛門取りあへず先以て其方貯へなき浪人の身として多くの金子御石碑料に調進せられし段由良之助殿甚だ感じ入れしが石碑を營むは亡君の御菩提殿に不忠不義をせし其方の金子を以て御石碑料に用ひられんは御尊靈の御心にも叶ふまじご有つてなそれ金子は封のまい相戻さるゝと詞の中より彌五郎懐中より金子取出し勘平が前にさし置けばはつさばかりに氣も轉動母は涙さもろ

共にコリヤ愛な悪人づら今といふ今親の罰思ひ知たか、皆様も聞いて下さり親父殿が年寄て後生の事は思はず犂の爲に娘を賣金調へて戻らしやるを待ちぶせして、あのやうに殺して取た金じや物天道様がなくばしらす何で御用に立つ物ぞ親殺しのいき盗人に罰を當て下されぬは神や佛も聞へぬあの不孝者お前方の手にかけてなぶり殺しにして下されわしや腹が立つわいのご身をなげふして泣き居たる聞くに驚き兩人刀追取つて弓手馬手につめかけ、彌五郎聲をあらげやい勘平非義非道の金取つて身の料の詫せよといはぬぞよ、わがやうな人非人武士の道は耳に入るまい親同然の舅を殺し金を盗だ重罪人は大身鏡の田樂さし拙者が手料理ふる

まはんさはつたさならめば郷右衛門かつしても盗泉の水を飲すこは義者のいましめ舅を殺し取たる金亡君の御用金になるべきか生得汝が不忠不義の根性にて調へたる金と推察有つてつきもごされたる由良之助様の眼力ほ、天暗れくさりながらハア情けなきは此事世上に流布有つて鹽谷判官の家来早野勘平非義非道を行ひしといは、こりや汝斗りが恥ならず亡君の御恥辱としらざるかこなくくうつけ者めないうぬ勘平これさ勘平おみやごうした者だ左程の事の辨なきなんじにてはなかりしがいかなる天覧が見入しとするごき眼に涙を浮め事を分け利をせむればたまり兼ねて勘平諸肌押脱脇指を抜くより早く腹へぐつさつきたてア、

いづれもの手前面目もなき仕合せ拙者も望み叶はぬ時は切腹と兼ての覺悟我舅を殺せし事亡君の御恥辱と有れば一通り申ひらかん兩人共に聞いてたべ、夜前彌五郎殿の御目にかゝり別れて歸るくらまされ山越猪に出合二ツ玉にて打ち留かけよつてさぐり見れば猪にはあらだ旅人なむ三寶誤つたり薬はなきかと懐中をさがし見れば財布に入つたる此金道ならぬ事なれ共天より我に與ふる金と直に馳行彌五郎殿に彼金をわたし立歸つて様子を聞ば打留たるは我舅金は女房を賣つた金、かほと迄する事なす事いすかのはし程違ふと言ふも武運に盡たる勘平が身の成り行き推量有れと血ばしる眼に無念の涙仔細を聞くより彌五郎すんと立上り死骸引上打返しムウ／＼と疵口吹め郷右衛門

是見られよ鐵砲疵には似たれ共これは刀でえぐつた疵、エ、勘平早まりしと言ふに手負も見て悔り母も驚く斗りなり、郷右衛門心付イヤコレ千崎殿ア、是にて思ひ當つたり、御自分も見られり通り是へ來る道端は鐵砲疵請けたる旅人の死骸立寄り見れば斧定九郎強慾な親九太夫さへ見限つて勘當したる悪黨者、身のイなき故に山賊するに聞いたるが疑ひもなく勘平が舅を討たはきやつが業エいそんなりやあの親父殿を殺したは外の者でござりますかかハアはつと母は手負に縋り寄りコレ手を合して拜みます、年し寄の愚痴な心から恨みいふたは皆誤りこらへ下され勘平殿必ず死んで下さるなと泣詫れば顔ふり上只今母の疑ひも我悪名も晴れたれば是をめぐりの思ひ出さし後よ

り追付舅殿死手三途を伴はんと突込刀引廻せばア、暫く／＼思はずも其方が舅の敵討つたるはいまだ武運に盡ざる所弓矢神の御恵にて一功立つたる勘平息の有る中郷右衛門が密に見する物有りし懐中より一卷を取出しさら／＼と押しひらき此度亡君の敵高野師直を討取らんと神文を取かはし一味徒黨の連判かくのごとしと讀も終らず苦痛の勘平其姓名は誰々成るぞやチ、徒黨の人数は四十五人汝が心底見届けたれば其方を指加へ一味の義士四十六人はをめぐりの土産にせよと懐中の矢立取出し姓名を書記し勘平これ血判心得たりと腹十文字にかき切り臟腑をつかんでしつかさ押へしサア血判仕つたア、のるなく早野勘平重氏血判たしかに相濟んだぞエ、忝や有難や我望み

祇園一力の段

由良之助

(竹本相生太夫
豊竹つげめ太夫)

重太郎

豊竹富太夫

喜太八郎

竹本文太夫

彌五郎

豊竹辰太夫

仲居

竹本隅榮太夫

おかる

(竹本南部太夫
竹本小春太夫)

仲居

竹本文字榮太夫

亭主

竹本播磨太夫

九太夫

竹本貴鳳太夫

伴内

竹本陸路太夫

平右衛門

(竹本相生太夫
豊竹つげめ太夫)

(野澤吉六
彌)

達したり母人歎いて下さるな奥の最期も女房の奉公も反古にはならぬ此金一味徒黨の御用金といふに母も涙ながら財布と俱に二包二人が前に指出し勘平殿の魂の入つた此財布鞆殿じやと思ふて敵討の御供につれてござつて下さりませ、チ、成程尤なりと郷右衛門金取り納め、思へば此金は縞の財布の紫麩黄金佛果を得よといひければア、佛果さげけからはし死ね、魂魄此土とままつて敵討ちの御供するさいふ聲も早や四苦八苦母は涙にかきくれながらナフ勘平殿此事を娘にしらしめて死目にあはしてやりたいイヤ、親の最後は格別勘平が死だ事必ず知らして下さるなお主の爲に賣つたる女房此事聞て不奉公せば主に不慮す

るも同然只其まゝにさし置かれよサア思ひ置く事なしと刀の切つ先き咽喉にぐつささしつらぬきかつげさふして息絶たりヤアもふ舞殿は死しやつたか扱も、世の中におれがやうな因果な者むまたさ一人有らふか親父殿は死なしやる頼みに思ふ舞を先き立ていとし可愛の娘には生き別れ年寄た此母が一人残りて是がママなんと生きて居られふぞコレ親父殿與一兵衛殿おれも一ツ所につれて往てくだされと、取付ては泣きさげびまた立ちあがつてコレ舞殿母も俱にござがり付てはふししづみあちらでは泣きこちらでは泣わつさばかりにござ伏聲をばかりに歎しは目もあてられぬ次第なり。郷右衛門つ、立ちあがりア、これ、老母なげかるゝは

人形

九 太 夫 吉 田 玉 七
 伴 内 吉 田 扇 太 郎
 亭 主 吉 田 榮 三 郎
 重 太 郎 吉 田 光 之 助
 喜 太 八 吉 田 市 松
 彌 五 郎 桐 竹 政 龜
 仲 居 大 勢
 お か る 吉 田 文 五 郎
 平 右 衛 門 吉 田 玉 松
 由 良 之 助 吉 田 榮 三

ここはりなれども勘平が最期の様子
 大星殿にくはしく語り入用金手渡し
 せば満足あらん首にかけたる此金は
 舞と舅の七々日四十九日や五十兩あ
 はせて百兩百ヶ日の追善供養後れん
 ころにとむらばれよ、さらばさらば
 おさらばと見送るなみだ見かへるな
 みだなみだの涙の立歸る人もはかな
 き。

(床本) 祇園一力茶屋の段

花に遊ばし祇園遊りの色揃へ東方南
 方北方西方みだの浄土か塗りにぬり
 立てびつかりびかゝり光りかゝやく
 はくや鬘子にいかな粹めも現ぬかし
 てぐんごるつくくやワイく
 くトサ九誰を頼まふ亭主は居ぬか
 亭主く是ばいそがしいはどいつ

様じやごなた様じやヨウ斧九太夫様
 御案内さばけうさいく九イヤ初め
 てのお方を同道申たきつふ取込そふ
 に見へるが一つ上げます座敷が有る
 亭ヤござります共く今晚は彼由
 良大盡の御趣向で名有る色達を掴み
 込み下座敷はふさがつてござります
 れごちうち亭座敷が明いてございま
 す九そりや蛛又蜘蛛の巢だらけで有ふ
 亭又悪口を九イヤサよい年をして女
 郎の蜘蛛の巢にかゝるまい用心亭コ
 リヤきついは下には置かれぬ二階座
 敷ソレ灯を燈せ仲居共何んさ伴内
 殿由良之助が体御らうじたか伴九太
 夫殿ありやいつそ氣違でござる段々
 貴公より御内通有つてもあれ程に有
 るふさは主人師直も存ぜず拙者に罷
 登つて見さごけ心得ぬ事有らば早速

知せよと申付ましたが扱く我もへ
んしも折れましてござる併し悴力彌
めは何んぞ致したな九こいつも折節
此處へ参り俱に放埒指合いくらぬが
ふしぎの一つ今晚は底の底を捜し見
んさ心巧みを致して参つた密々にお
咄し申さふイザ二階へ件先づ九
然らば斯お出歌じつは心に思ひはせ
いであだなほれたくの口先はいか
いつやでは有るはいな重彌五郎殿喜
多八殿是が由良之助殿の遊び茶屋一
力と申のでござる重誰そちよ頼み
たい仲アイくごなた様じやへ重ア
イヤ我々は由良之助殿に用事有つて
参つた奥へ往て言ふには矢間重太郎
千崎彌五郎竹森喜多八でござる此間
より節に迎ひの人を遣はしますれど
お歸りのない故三人連で参りました

ちと御相談申されば成らぬ儀がござ
る程にお逢なされて下されど吃度申
ておくりやれ仲重は何ん共氣の毒で
ござんす由良様は三日以來呑みつ
けお逢なされてからたわいは有るま
い本性はないぞへ重ハテ扱てまあそ
ふいふておくりやれ仲アイく重彌
五郎どのお聞きなされたか彌承は
つて驚き入りました初めの程は敵へ
聞かす計略と存じましたがいかがふ
遊びに實が入り過ぎまして合點が参
らぬ喜何んぞ此喜多八が申た通り魂
が入れ替つてござらふがのいつそ一
間へ踏込重イヤく得さ面談致した
上彌成程然らば是に三人相待ちませ
ふ、折に二階へ勘平が妻のお輕は互
いさまし早里馴れて吹風にうさを暗
して居る所へ由ちよさいてくるぞや

由良之助も有る侍が大事の刀を
忘れて置たつい取つてくる其間に掛
けものもかけ直し爐の炭もついで置
きやアソレくこらちの三味
線ふみおるまいぞ是ははしたり九太は
もう逝れたそふな父よ母よ泣聲聞
けば妻にあふむのうつせし言の葉エ
何んじやいな置しやんせ由傍り見
廻はし由良之助的燈籠の明りを照し
讀長文は御臺より敵の様子こまふく
さ女の文の後や先きり々ではかご
らす餘所の戀より羨ましくおかる
は上より見おるせよ夜目遠目成り字
性もおぼる思ひついたるのべ鏡出し
て寫して讀取る文章九下家よりは九
大夫むくりおるす文月がげにすかし
讀さは輕神ならずほさげかりしお
輕がかんざしげつたり落れば由下

には、つと見あげて後へ隠す文九椽
 の下には猶多つば輕上には鏡の影隠
 し由良様が由おかるかそもじはそこ
 に何してぞ輕私しやお前にもりづぶ
 され餘りつらさに醉さまし風に吹か
 れて居るはいナ由ムンハテなふワリ
 ヤよふ風に吹かれてじやのイヤがるそ
 もじにちと咄したい事がある屋根越
 の天の川でこゝからは言はぬちよつ
 さおりてたもらぬか、咄したいさは
 頼みたい事かへ由マアそんな物、輕廻
 つてきやんしよ、由イヤ、段梯子へ
 おりたらば仲居が見付けて酒にせふ
 ア、ごふせふなム、幸ひ爰に九ツ梯
 子是をふまへておりてたも、小屋根
 に掛ければ、輕此様子は勝手がちがふ
 てチ、こはごふやら是はあぶない物
 由大事ないくあぶないこはいは昔

の事三間づゝまたげても赤かうやく
 もいらぬ年ばへ輕あほう言はんすな
 船に乗つた様でこはいはいな由道理
 で船玉様が見へるは輕チ、覗かんす
 ないナ、由洞庭の秋の月様を拜み奉
 るじや輕イヤモウそんならおりやせ
 ぬぞへ由おりざおろしてやる輕アレ
 又悪い事を由やかましいく、生娘か
 何ぞの様に逆縁ながら、後よりじつ
 とだきしめ抱おろし何さそもじは御
 らうじたか輕ハイい、由見たで有
 く、輕何じややら面白そうな文由ア
 ノ上から皆よんだか輕チ、くご由ア
 い身の上の大事そこそは成りにけり
 何んの事じやぞいな、由何の事はお
 かる古いがほれた女房になつても
 らぬか輕おかんせ嘘ぢや、由サア嘘か
 ら出た誠でなければ根がとげぬおふ

さいやく、輕イヤいふまい、由ソリヤ
 なぜ輕サアお前のは嘘から出た誠ぢ
 やない誠から出た皆うそ、由おかる輕
 アイ、由うけ出そふ輕エ、由嘘でない
 證據に今宵の内に身請せふ輕ムンイ
 ヤわしには、由間夫があるならそはし
 てやる輕そりやマアほんさかへ、由
 侍、冥利三日成り共園ふたら夫れか
 らは勝手次第輕ハア嬉しうござんす
 さ言はして置いて笑をでの、由イヤ直
 ぐに亭主に金渡し今の間に埒さそふ
 氣遣ひせすぞ待つて居や輕そんなら
 必ず待つて居るぞへ、由金渡ししてくる
 間どつちへも行きやるな女房じやぞ
 輕夫もたつた三日、由それ合點輕エ、
 忝ふござんす歌世にも因果な者な
 らわしが身でや可愛い男にいくせの
 思ひエ、何じやいな置しやんせ、平ア

「遠は花の都の庭園町賑しい事だ
なア、何んさやらいったはい入り相
の鐘は廊の夜明けかなよばよくいつ
たはいハ、ハ、ハ、ヤそれはそうさ
妹、かるが此廊へ勤め奉公致してお
るさ聞たがごふぞあいたい物だがチ
、幸ひの女中コレちよと物を尋れ
たいが山崎へんから此廊へ勤め奉公
に来て居るかるさ言ふ女御存じれい
か知つて居ればごふぞ致へてくれま
へかな、輕いま手のなせぬ事仕て
る程に勝手もさで聞て下さんせ平
アそふは思つたが勝手元も何だかご
て、くさいそかしいどうぞ致へてく
れるコレ女中、輕エ、しらぬはいな平
そふすげなく言はすさふぞ致へて
くれるコレ女中、く、く、ヤアわりや
妹、かるでれへか、輕ヤア兄様か恥か

しい所で逢ましたさ顔を隠せば平ア
、苦しうない、く、關東よりのもどり
がけ母人に逢て委しく聞た夫のため
お主の爲よく賣れた出かした、く、な
ア輕そふ思ふて下さんすりやわしや
嬉しいシタガマア悦んで下さんせ思
ひがけなふ今宵請出さる、答、夫は
重疊シテ何人のお世話で輕サアお前
も御存じの大星由良の助様のお世話
で平、何んだ由良の助殿に請出される
えれば下他からの馴染か、輕、何のいな
此中より二三度酒の相手夫も有らば
添はしてやる隙がほしくば隙やるさ
結構過た身請け平、ム、扱ては其方を
早野勤平が女房さ、輕、エ、しらすじ
やぞへ親夫のはぢなれば明かして何
の言いませふ平、ムンスリヤ本心放埒
者お主のあだを報ずる所存はないに

極つたな輕イエ、く、コレ兄様有るぞ
へ、平、有るさは何が輕高ふば言は
れぬコレ斯々々囁けば平、ム、ハ、ハ、ハ、
輕あ平、ムンスリヤ其文體に見たな輕
アイ残らず讀んだ其後で互ひに見合
はず顔と顔それからじやらつき出し
てつい身請けの相談、平、アノ其文體ら
ず讀んだ後で輕、アイナ、平、ヤ夫で聞へた
妹、逆も遁れぬそちの命身共にくれ
よ、さ、抜き打ちにばつしご切れば、輕、
やつと飛退コレ兄様わしには何誤り
勘平さ言ふ夫も有りきつと二親ある
からは、こな様のま、にも成るまい受
出されて親夫にあはふと思ふがわし
や、樂しみごんな事でもあやまらふ赦
して下んせ致して、手合せすれば
平、右衛門、拔身を捨て、可愛や、妹、わ
りや、何にも知られへな親與一兵衛殿

は六月廿九日の夜人に切られてお果
 なされたけやイヤそれはまあ平ア
 コリヤくくまだ恸りすな。ま
 だく後に恸りの親玉があるわい、
 われが請出されて添ふと思ふ勘平は
 な輕兄様勘平殿は平サア勘平はな輕
 よい女房様でも出来たのかへ平エ、
 そんな陽氣な事じやないはい輕そんな
 なら勘平様は平サア其勘平は勘平で
 やつぱり勘平だわい輕エコレ兄様
 勘平様はごふさしやんしたぞいな平
 ムサア其勘平は腹を切つて死んだばや
 い輕エー、ー、ワン平チ、道理だ
 く様子咄せばワアコリヤ大へんだ
 妹が目まはしたア、誰か居れへ
 か女郎が目をまはした仲居衆くエ
 誰も居れへ待てく、チ、幸ひの手
 水鉢今水をくれるぞ待くくッソラ

水だ、おかるやい、輕ア、ー、ー、
 平コリヤごふだ氣が付いたか、
 平しつかりしろ、輕チ、兄様平チ
 兄だ、ッソラ平右衛門だ、輕チ、兄
 さん勘平様はへ平チエ、情けれへま
 だ尋ぬるか。其勘平は友朋輩の面
 晴に腹を切つて死んだはいやい、輕ヤ
 アくくそれはマアほんごかいの
 コレなふく、ご取り付いてコレ兄様
 ごふせふぞいな平チ、道理だ、輕ごふ
 せふぞいなア平チ、尤だ輕ごふせ
 ふぞいなアくく、平チ、道理
 だくく、はいやい様子咄せば
 長い事お勞はしいは母者人言ひ出し
 ては泣き思ひ出しては泣娘かるに聞
 かしたら泣き死にするで有る必ずい
 ふてくれなごのお頼み言ふまいごは
 思へ共連も遁れぬそちが命其譯は忠

義一途に凝かたまつた由良の助殿勘
 平女房さ知られば受出す義理もな
 し元來色には猶ふけらす見られた狀
 が一大事請け出して差殺す思案の底
 まで見へたまよしそふなふても壁に
 耳外より洩ても其方が科密書を覗き
 見たる、誤りころさにやならぬ此場
 の宜儀人手にかけふより我手につ
 大事を知つたる女妹、さて赦されず
 そそれを功に連判の數に入つてお供
 に立ん少身者の悲しさは人に優れた
 心底を見せれば數には入られぬ聞き
 譯て命をくれ死でくれ妹と事を分
 けたる兄の詞輕おかるは始終せき上
 く、便りのないは身の代を役に立つて
 の旅立ちが暇乞にも見へそな物と恨ん
 で斗りおりました勿體ないがご、様
 は非業の死でもお年の上勘平殿は三

道行旅路の嫁入

人形

妻戸無瀬
小浪
桐竹紋十郎

野鶴野鶴野鶴野鶴野鶴野鶴野鶴野鶴野鶴野鶴
澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤
吉團喜友叶八團新豊竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹
伊之助太郎六衛門久太夫松太夫千駒太夫綾太夫
男三助二作郎助六叶夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫

十に成るやならず死ぬるのは嘸悲
しかる口惜かる達たかつたで有るふ
のになぜ逢はせては下さんせぬ親夫
の精進さへ知らぬはわたしお身の因
果何の生きておりませうお手にかゝ
らばかゝりうがお前をお恨みなされ
ませふ自害した其後で首なりと死骸
なりと功に立つなら功にさんせさら
ばでござんす兄様と言いつゝ刀取り
上ぐる由ヤレ待て暫しとゞむる人
は由良之助平ハツと驚く平右衛門輕
お輕は放して殺してと由あせるを押
さへてホウウ兄妹共心底見へた兄は
東の供を赦す妹はながらへて未來
への追善輕サア其追善は冥途の供と
由もぎ取る刀をしつかと持添へ夫
勘平連判には加へしかど敵一人も敵
取らず未來で主君に言ひ譯有るまじ

其言譯はコリヤ爰にとぐつと突込疊
の透間九下には九太夫肩先ぬはれて
七轉八倒由ソレ平右衛門くらひ醉た
其客に加茂川でナ平いかか斗ひまし
よ由水ぞうすいをくらはせい平ハ
ア由イケ平してこいなア。
(床本) 道行旅路の嫁入
浮世とは誰いひそめてあすか川扶持
も知行も瀬さかはりよるべも涙の下
人に結ぶ鹽谷のあやまりは戀のかせ
杭加古川のむすめ小浪が言號結納も
さらす其儘にふり捨られし物思ひ母
のおもひは山科の舞の力彌をちから
にて住家へおして嫁入も世にありな
しの義理遠慮こしもとつれず乗物も
やめて親子のふたりづれ、都の空に
心ざす雪のはだへもさむそらは寒紅

梅の色そへて手さき覺へすこゝへ坂
 さつたさうげにさしかゝり見かへれ
 ば富士のげふりの空に消行衛もしれ
 ぬ思ひをばはらす嫁入の門火ぞと祝
 ふて三保の松ばらにつゞきなみ松街
 道をせましさうつたる行列はたれさ
 しられどうらやましア、世が世なら
 あのごとく一度のはれさ花かざり、
 だてを駿河の府中過城下すぐれば氣
 さんじに母のこゝろもいそ〜と二
 世のさかづきすんで後園のむつごさ
 さゝめご親ならずすしらすさつた
 のほそ道もつれあひ男松の肌にびつ
 たりさしめてからみし新枕、女夫が
 中の若縁り抱て寢松の千代かけて替
 るまいぞの睦言は嬉しからふさほの
 あかす、アノ母さまのさし合な脇へ
 こかくしてまり千川宇都の山へのう

つゝにも夢にも早ふ大井川、水のな
 がれさ人こゝる都の花にくらぶれば
 日影の紅葉色づいてつい秋がきて小
 男鹿の夫ゆへならば朝夕にしん苦す
 るのも何の其此手拍のうら若き二人
 が中にやゝ産んでれん〜ころゝん
 やれん〜が守はごこへいたごこさ
 は知た其人に逢ふて恨を何こマアゴ
 ふ言てよからふさしんき嶋田のうさ
 はらし我身のうへをかくさだに人し
 らすかの橋こへて行ば吉田や赤坂の
 まれく女のこゑそるへ縁をむすば
 清水寺へまいらんせ音羽の瀧にぞん
 ぶりさ毎日そふいふて拜まんせそふ
 じやいな、しゝきがんかうがういれ
 いにうさう神樂太鼓にヨイコノゑい
 こちの晝寝をさまされた都殿御にあ
 ふてつらさがたりたりたやそふさも

くもしも女夫さかゝり〜ならば伊
 勢様の引合せ鄙びたうたも身にさつ
 てよい吉左右に鳴見また繁田のやし
 るあれかまよ七里のわたし帆をあげ
 て楳びやうしそるへてヤツシツシ楳
 ざる音はずむしかイヤきり〜す
 鳴や霜夜さよみたるは小夜ふけてこ
 そくれまでさ、かぎりあるふれいそ
 がんご母がはしれば娘もはしり空の
 あられに笠覆ひ船路のさもの後や先
 しやう野龜山せきとむるいせさあづ
 まの別れ道驛路のすゞの鈴鹿こへあ
 ひの土山雨がふる。ふり見ふらずみ
 定めなき旅はいる〜うきが中あな
 たの松蔭花やかに壘笠立笠大鳥毛行
 列揃へぼつたる武門の曠をあり〜
 さうつすや田子の浦人が壁面白く手
 をたゝき富士の白雪朝日でさける娘

山科閑居の段

中 竹本長尾太夫
野澤八助
切 竹本津太夫
鶴澤綱造

人形

大星由良之助 吉田榮三
妻お石 桐竹政龜
大星力彌 桐竹紋太郎
妻戸無瀬 吉田文五郎
娘小浪 桐竹紋十郎
下女りん 吉田市松
加古川本藏 吉田玉次郎
仲居 大 大 勢 勢
太鼓持 大 大 勢 勢

嶋田は寝てこく帯のしんから底から
戀にや夜も日も明ぬ物じやさなサア
サかはいさが増わいな梅の苔と戀仕
の文はひらく間を待兼山の眞實せい
文色にや憂身をつくす物じやさなサ
アサ可愛さが増わいなうかれて歸る
里わらは、みなくちの葉にいひはや
すいしべ、石塙で大きいや小石拾ふ
て我夫さなで川さすりつ手にすへて
やがて大津や三井寺のふもとを越て
山科へほどなきささへいそぎゆく。

(床本) 山科閑居の段 (中)

風雅でもなくしやれてなくしやう事
なしの山科に由良之助が住居祇園
の茶屋にきのふから雪の夜明し朝辰
りたいこ仲居に送られて酒がほたへ
る雪こかし雪はこけいで雪こかさ

仁体捨し遊びなり旦那申旦那座敷
の景よふござりますお庭の藪に雪持
つてとなつた所さんさ繪に畫た通り
けうさいじやないかいのふお品サア
此景を見て外へはどつちへもいきた
うはござりますまいがナへツ朝夕に
見ればこそ有住吉の岸の向ひの淡路
嶋山さいふ事しらぬか自慢の庭でも
内の酒は呑ぬくエ、通らぬやつ
くサアく奥へく奥へどこにぞ
お客も有りさ先にツ立て飛石の詞も
しごろ足取もしごろに見ゆる酒機嫌
お戻りそふなご女房のお石が軽ふ汲
で出る茶屋の茶よりも氣の花香お寒
からふご格氣せぬ詞の壺茶碎醒し一
口呑で後打明けア、奥無粹なぞや
く折角面白酔た酒醒せさばア、
ア、降たる雪かないかに餘所のわ

る達が嗚悒氣とや見賜ふらんそれ雪を
 目づかひて遊隙わるふ歸りけり聲
 聞えぬ迄行き過ぎさせ、由良の助枕
 を上げヤア力彌遊興に事よせ丸めた
 この雪所存有ての事じやが何ぞ心得
 たぞハツ雪と申す物は降時には少し
 の風にも散り軽い身でござりませふ
 共あの如く一致して丸まつた時は嶺
 の雪吹に岩をも砕く大石同然重いは
 忠義其重い忠義を思ひ丸めた雪も餘
 日數を延過してはと思召てのイヤ
 由良の助親子原郷右衛門など四
 十七人連判の人數はナ皆主なしの日
 かげ者日かげにさへ置けば解けぬ雪
 せく事はな言ふ事爰は日當り奥
 の小庭へ入れて置け螢を集め雪を積
 も學者の心長き例女共切戸内から
 明てやりやれ塙への狀認ん飛脚が
 來たらばしらせいよアイ間の切

(床本) 山科閑居の段 (切)

る達が嗚悒氣とや見賜ふらんそれ雪
 は打綿に似て飛で中入と成奥はかゝ
 さまごいへばごつと世帯じむさいへ
 り加賀のこ布へお見廻いの選いは御
 用捨伊勢海老と盃穴の稻荷の玉垣
 は朱ふなければ信むさめるさいふ様
 な物かいチイこれくくくこぶら返
 りじや足の五指折たくくおつこよし
 く次手にかうじやさ足先でアこ
 れはたへさしやんすな嗜ましやんせ
 酒が過ぎるさたはいがなほんに世
 話でござらふのさ物やはらかにあい
 しらふ力彌心得奥より立出申く母
 人親父様は御癡なつたか是上られい
 と指出す親子が所作を塗り分けても
 下地は同じ桐枕チーチー應は夢現イ
 ヤもふ皆いにやれハイくくくそん
 ならば旦那へ宜しう若旦那と御出

戸の内雪こかし込み戸を立る襖引立
 入にける。

人の心の奥深き山科の隠れ家を尋れ
 て爰に来る人は加古川本藏行國の女
 房とせ道の案内の乗物をかたへに
 待せ只一人刀脇差さすげに行儀亂
 さす庵の戸口頼みませうく言ふ
 聲に痺はづして飛で出る昔の奏者今
 のりん。どうれさいふもつかうご成
 ハツ大星由良の助様お宅は是かな、
 左様ならば加古川本藏が女房とせ
 でござります誠に其後は打絶ました
 ちとお目にかゝりたい様子に付き遙
 々参りましたと、ノコソ傳へられて
 下されさいひ入れさせて、表の方乗
 物はへそ昇寄せさせ娘爰へと呼び出

せば谷の戸明けて驚の梅見付けたるほ、笑顔まぶかに着たる帽子の内、アノ力彌様のお屋敷はもふ愛かへ、わしや恥かしいと媚かし取散す物片付けて先づお通りなされませ下女が傳へる口上に駕の者皆歸れナサ、御案内頼みますさいふもいそく、娘の小派母に付き添座に直ればお石しこやかに出むかひははくお二方共よふぞや御出、さくよりお目にもかゝる答お聞き及びの今の身の上お尋ねに預かりお恥しいあの改まつたお詞お目にかゝるは今日始めなれど先達て御子息力彌殿に娘小派を言號致したからはおまへなり、わたしたしは、
〳〵痛入る御挨拶殊に御用しげい本藏様の奥方寒空さいひ思ひがけない

御上京がさなせ様はさもあれ小派御寮チ、さぞ都めづらしからふの。祇園清水智恩院アノ大佛様御らうじたかへ、金閣寺拜見あらばノコレよ、い傳む有るぞへさ、心置なき挨拶に只あい、くも口の内帽子まげゆき風情なり。さなせは行儀改めて今日参る事餘の儀にあらず、是成る娘小派言號致して後御主人鎌谷殿不慮の儀に付き由良の助様力彌殿御所在もさだかならず、移りかはるは世のならひ替らぬは親心さやかに聞き合せ此山科にござる由承りましたゆへ此方にも時分の娘早ふお渡しチホ、申たさモ近頃押し付けがましいが夫も参る答なれど出つ使に隙のない身の上此二腰は夫が魂はをさせば則ち夫本藏の名代さ、わたしが役の

二人前、由良の助様にも御意得まし祝言させて落付たい、幸ひけふは日柄もよし御用意なされ下さりませと相述る是は思ひもよらぬ仰折悪ふ夫由良の助は他行去りながらもし宿におりましたお目にかゝり申さふならば御深切の段千萬忝ふ存じまする言號致した時は故殿様の御恩に預り御知行頂戴致し罷りある故本藏様の娘御の貰ひませうチ、然らばくれうごさ言ひ約束は申したれ共只今は浪人入道ひ連もござらぬ内へいかに約束なれば連大身な加古川殿の御息女世話に申す提燈に釣鐘つり合はぬは不縁の元ハテモ結納を遣したご申すではなしとこれへなりと外々御遠慮な不道はされませさ申さるゝでござりませふと聞てはつこは思ひなが

らアノまあお石様のおつしやる事わいの、いかに卑下なされう逆本藏と由良之助様身上が釣合はぬと。コレそんならば申しませう。手前の主人は小身ゆへ家老を勤る本藏は五百石堀谷殿はサ大名御家老の由良之助様は千五百石。すりや本藏が知行は千石違ふを御合點で言號はなされぬかへ。只今は御浪人本藏も知行は皆違ふてから五百石ア、イヤコレソリヤ其お詞違ひます。五百石は扱置壹萬石違ふても心さ心か釣あへばノウ大身の娘でも嫁に取るまいサものでもないム、ヤ。こりや聞き所お石様心さ心か釣り合はぬとおつしやるはごの心じや。ササー、聞ふサイノ主人堀谷判官さまの御生害御短慮さば言ひながら正直をもとす

るお心より發りし事それに引きかへ師直に金銀をもつて嬪詔ふ追従武士の祿を取る本藏殿二君に仕へぬ由良之助も大事の子に釣合はぬ女房は持されぬと、聞きもあへず膝立直しコレ詔武士さば誰が事様子によつては聞き捨られぬ。ウ、い、がそこを赦すが娘のかはいさ。夫に負るは女房の常祝言有ふが有るまい言號有るからは天下晴れての力彌が女房ム、コリヤ面白い女房ならば夫がさる。力彌にかはつて此母がさつた、と言ひ放し心隔ての唐紙をはた引立入にける娘はわつと泣出し折角思ひ思はれて言號した力彌様に逢はせてやるそのお詞を便りに思ふてきたものを姑御の胸慾にさられる覺えはわたしやない。母様ごふぞ詫言して

祝言させて下さりませと繩り敷けば母親は娘の顔をつくづく、こ打ちなめ、親の怒目かしられ共ほんにそなたの器量なら十人並にもまさつた娘よい舞をむなご詮議して言號した力彌殿尋れてきたかひもなう。舞にも知らさずさつたさは義理にも言はれぬお石殿姑去りはマ心得ぬ。ム、扱は浪人の身のよるべなう筋目をいひ立て有徳な町人の舞になつて義理も法もコリヤ忘れたなナフ小浪今言ふ通りの男の性根。さつたさいふを面當にほしがる所は山々、外かへ嫁入りする氣はないかコレ大事の所泣かず共しつかりと返事仕や。サコレごふじや、尋る親の氣は張り弓。アノ母様のどうよくな事おつしやります。國を出る折さ、様のおつ

しやつたは浪人仕ても大星力彌行儀
さいひ器量さいひ仕合せな筈を取つ
た。貞女兩夫にまみへず。譬へ夫に
別れても又の殿御を設けなよ。主有
女の不義同然必ずく寢覺にも殿御
大事を忘るゝな由良之助夫婦の衆へ
孝行盡し夫婦中睦じい違あじやらに
も情氣ばしゝてさらるゝな。案ぜう
かさて隠さず懐妊になつたら早速
に知せてくれさおつしやつたをわた
しやよふ覺へて居る。さられて逝で
さゝ様に苦に苦をかけてごふいふて
ごふ言譯も有ふ共力彌様より外に餘
の殿御わしやいやくこゝろに懸
をたてぬく心根を聞に絶兼母親の涙
一途に突詰し覺悟の刀抜き放せば母
様是は何事さ押留られて顔を上げ何
事さばくくエ、曲かないわいの

今もそなたがいふ通り一時も早ふ祝
言させ初孫の顔見たいと娘に甘いは
爺のならひ悦んでござる中へまだ祝
言もせぬ先きに去られて戻りました
迎ごふ運で逝れふぞこいふてさきに
合點せにや仕様もやうもないわいの
殊にそなたは先妻の子わしとばなさ
ぬ中じや故およそにしたかと思はれ
てばごふも生きては居られぬ義理此
通りを死んだ後で爺御へ言譯してた
もやアノマア勿体ない事おつしやり
ますわいなア。殿御に嫌はれわたし
こそ死べき筈生てお世話になる上に
苦を見えまする不孝者母様の手にか
けて、私を殺して下さりませ去られ
ても殿御の内愛で死ぬれば本望じや
早ふ殺して下さりませ。チ、よふい
やつた出かしやつたくよふのそな

た斗り殺しはせぬ此母も三途の友そ
なたをおれが手にかけて、母も追付
後から行、覺悟はよいかと立派にも
涙さめて立かゝりコレ小浪アレあ
れを聞きや表に虚無僧の尺八鶴の葉
籠り鳥類でさへ子を思ふに科もない
子を手にかけるは因果と因果の寄合
と思へば足も立兼てふるふ拳を漸々
に振り上る又の下尋常に座をしめ手
を合せ南無阿彌陀佛と唱ふる中より
御無用と聲かけられて思はずもたる
みし拳尺八も供にひつそさしづまり
しがチ、そふじや今御無用と止たば
虚無僧の尺八よな、助けたいが山々
で無用さいふに氣おくれし未練なさ
笑はれぬ娘覺悟はよいかやと又振上
る又吹出すそなたの拍子に御無用ム
、又御無用と止たば修行者の手の内

か振上げた此手の内かイヤお刀の
 手の内御無用俸力彌に祝言させふエ
 いそふ言ふ聲はお石殿そりや眞實か
 誠か尋る襖の内よりあいに相生
 の松こそめでたかりけれ祝儀の小諸
 白木の小四方目八分に携へ出義理有
 る中の一人娘殺そふまで思ひつめ
 たさなせ様の心底小浪殿の貞女志
 しがいとをなしたせにくだい祝言さす
 其かばり世の常ならぬ嫁の盃。請
 取は此三方御用意あらばささし置け
 ば少しは心休まりて拔たる刀鞘に納
 め世の常ならぬ盃さは引出物の御
 所望ならん、此二腰は夫の重代刀は
 正宗指添は浪の平行安家にも身にも
 かへぬ重寶是を引手と皆まで言さす
 イヤコレ浪人と侮て價の高い二腰
 まさかのときに賣拂へと言はぬ斗り

の掣引手、御所望申すは是ではない
 ムーそんなら何の御所望を此三方へ
 は加古川本藏殿のお首が乗せて貰ひ
 度いエーそりや又なげな御主人搦谷
 判官様高野師直にお恨み有て鎌倉殿
 で一刀に切りかけ賜ふ其時こなたの
 夫加古川本藏其座に有て抱き止め殿
 を支へた斗りに御本望もとげられず
 敵は漸々薄手斗り殿はやみく御切
 腹口へこそ出し賜はれ其時の御無念
 は本藏殿に憎しみむかゝるまいかサ
 有まいか家來の身として其加古川
 娘あかんさん女房に持つ様な力彌じ
 やと思ふての祝言ならばノコレ此三
 方へ本藏殿の白髪首。否と有げどな
 たでも首を並る尉さ姥それ見た上で
 盃させふサアサア、否か應かの返
 答をさ尖き詞の理屈詰親子ははつと

差うつむき途方に暮し折からに加古
 川本藏が首進上申お請取なされよと
 表に控へし虚無僧の笠めぎ捨てしづ
 ぽんこ内へ這入ばヤアお前はさゝ様
 本藏殿爰へはごふして此形は合點が
 いかぬこりやごふじやと咎る女房ヤ
 アさばんくご見苦しい始終の仔細は
 皆聞いたそち達にしらさす爰へ来た
 様子追てサ先つだまれ、ヤナニ其
 元が由良之助殿の御内證エーチお石
 殿よな今日の時宜斯くあらんと思ひ
 妻子にも知せず様子を窺ふ加古川本
 藏案に違はず拙者が首掣引出にほし
 いさなハハウハハハハハハハハハ
 ーハハハハハハハハハハハハハハハハ
 人の怨を報はんと言ふ所存も無く遊
 興にふけり大酒に性根を亂し放埒な
 る身持日本一のおほうの鏡蛙の子は

蛙に成る親に劣らぬ力彌めが大だは
けだはいうるたへ武士のなまくらは
かれ此本藏が首は切れぬ馬鹿つくす
なご踏碎く破三方のふち放れ。こつ
ちから弾にや取らぬヤアちよこさい
な女めと言せも果すヤア過言なぞ本
藏殿浪人の鎧刀切るか切れぬか搦梅
見せふ不祥ながら由良之助が女房望
む相手じやサア勝負くくご裾引
上げ長押にかけたる鎧追つ取り突か
いらんすその氣色是は短氣なマア待
つてごこめ隔つる女房娘コリヤ邪
魔ひろぐなごあらけなく右ご左へ引
退る間も有らせす突かくる鎧のしほ
首引つ掴みもちつて拂へば身を背け
諸足ぬわんごひらめかす、はむれを
蹴つて蹴上ぐれば拳放れて取落す鎧
奪はれじご走寄る。腰際帯際引つか

みごふご打付け動かせず。膝にひつ
敷強氣の本藏、しかれてお石が無念
の齒がみ。親子ははあくあやぶむ
中へかけ出る大星力彌、捨たる鎧を
取る手も見せず本藏が馬手のあばら
弓手へ通れと突通す。うんご斗りに
かつげごさふす。コハ情なやご母娘取
付き歎くに目も懸すごめさ、んと
取直す。ヤア待て力彌早まるなご、
鎧引ごめて由良之助手頁に向ひ一別
以來珍らしく本藏殿御計略の念願ご
いき弾力彌が手にかゝつて嘸本望で
ごさらふ。のこ、星をさいたる大星
が詞に本藏目を見開き主人の尊儀を
晴さんご此程の心遣ひ遊所の出合に
氣をゆるませ徒黨の人数に揃ひつら
ん思へば貴殿の身の上は本藏が身に
有べき筈。當春鶴ヶ岡造營の砌り主

人桃井若狹之助高野師直に恥しめら
れ以てのほか御憤某を密に召さ
れ、まつかうく物語り明日御殿
にて出くはせ一刀に討留るご思ひ詰
たる御顔色ごめてごまらぬ若氣の
短慮小身故師直に賄賂薄きを根に持
つて恥しめたるご知たる故主人に知
らせす不相應の金銀衣服臺の物、師
直へ持参してエハ心に染ぬ詔ノも
コレ主人の大事ご存ずるから賄賂頁
せあつちから誤つて出た故に切るに
切られぬ拍子抜け主人が恨もさらり
ご晴れ相手がはつて搦谷殿の難儀ご
なりしは則ち其日相手死すは切腹に
も及ぶまじご抱留たは思ひ過した本
藏が一生の誤りは娘が難儀ご白髪
の、コレ此首飾殿に進ぜたご女房
娘を先へ登し媚諂ひしを身の科にお

暇を願ふてなコレ道をかへてそち達より二日前に京着、若いおりの遊藝が役に立つた四日の内こなたの所存を見ぬいた本蔵、手にかゝれば恨す晴れ約束の通り此娘力彌に添せて下さらば未來永劫御恩は忘れぬコレ手を合して頼み入る忠義にならでは捨ぬ命子故に捨る親心、推量あれ由良殿さ、言ふも涙にむせ返れば妻や娘は有にも有れずほんにこうさは露知らず死おくれた斗りにお命捨るは餘りな冥加の程が恐ろしい赦して下され父上さ、かつげと伏して泣きけぶ親子が心思ひやり大星親子三人も供にしをれて居たりしがヤア、本蔵殿君子は其罪を悪んで其人を悪まずと言へば縁は縁恨は恨と格別の沙汰も有べきに、嘸恨みに思はれんが所

詮此世を去る人底意を明て見せ申さんさ未前を察しておく庭の障子さりと引明れば雪をつかれて石塔の五輪の形を二つまで造り立しは大星が成行果を現はせりとなせばさかしく、御主人の怨を討て後二君に仕へず消るさいふお心のアレあの雪力彌殿も其心で娘を去たの胸怒は御不便あまつてお石様恨だがわしや悲しいア、コレ、コレ、こなせ様のおつしやる事わいの玉階の八千代までとも祝はれず後家に成嫁取つた此様なめでたい悲しい事はない。ア、コレ、
 ～～斯言事がいやさにな、むこふつらふ言たのが嘸憎からたてござんしよのイ、エイナわたしこそ腹立ちま、町人の舞に成つて義理も法も忘れたかと言ふたのが恥かしいやら悲

しいやらごぶも顔が上られぬわいな
 お石様、ア、コレ、コレ、こなせ様氏も器量も勝れた子何さして此様に果報拙ない生れやと聲も涙にせき上る。本蔵あつき涙を押へハッア、嬉しや本望や吳王を誅めて誅せられ辱めをわらひし吳子胥が忠義は取るに足らず忠臣の鑑さは唐土の豫讓に日本の大星昔より今に至るまで唐に日本にたつた二人其一人を親に持つ力彌が妻に成つたるは女御更衣備わるよりコレヤ百倍勝つてそちが身は武士の娘の手柄者手柄な娘が舞殿へお引の目録進上と懐中より取出す力彌取つて押し戴き開き見ればコハいかに目録ならぬ師直が屋敷の案内一々に玄關長屋侍部屋水門物置柴部屋まで繪圖に委しく備付けたり。由良

の助はつと押戴きへエ、有難しく徒黨の
 人敷は揃へ共敵地の案内知れざる故發足も
 ナコレ是迄は延引せり此繪圖こそは孫吳が
 秘書我爲の六踏三略兼て夜討を定めたれば
 織襦子にて塀を越へ忍び入には縁側の雨戸
 はづせば直に居間、爰をしきつてコレく
 く々斯せめても親子が悦び手負ながら
 もぬからぬ本藏、アイヤく夫は僻言なら
 ん用心きびしき高野師直障子襖は皆尻ざし
 雨戸に合栓合樞こちてもはづれずかけやに
 てこぼたば音して用意せん、サアサ、サア
 くくそれいかイヤ、夫にこそ術有り凝
 ては思案にあたはず遊所よりの歸るさ、
 思ひ寄たる前裁のアレくアノ雪持竹、雪
 戸をはずす我工夫仕様、爰にて見せ申さん
 さ庭に折しも雪深くさしもに強き大竹も雪
 の重さにひいわりこしはりし竹を引き廻し


て鴨居にはめ雪にたはむは弓同然此如く弓
 を拵へ強を張り鴨居さ敷居にはめ置てサア
 サ、一度に切て放つ時はまづ此様にぞ積
 つたる枝打拂へば雪散て延るは直なる竹の
 ちから鴨居たはんで溝はづれ障子残らずば
 たくく本藏苦しさ打忘れハハハハハ
 いしたり計略と言ひ義心といひか程
 の家來を持たながら了簡も有べきにあさきた
 くみの鹽谷殿口惜き振廻やと悔みを聞に御
 主人の御短慮成る御仕業今の忠義を戰場の
 御馬先にて盡さばと思へば無念にさぢふさ
 がる胸は七重の門の戸を洩るは涙ばかりな
 り。力彌はしづくおり立て父が前に手を
 つかへ本藏殿の御芳志により敵地の案内知
 たる上は泉州堺の天川屋義平方へも通達し
 荷物に工面仕らん、聞もあへず何さく
 山科に有事隠れなき由良の助人数集めば人

明・いる・感・の・い
 一南 温 泉 料 理

のまなみ 一南 温 泉 料 理

一七・一〇七・五南
 廿一九二五・二三三
 三〇三六西

……は用御の話電お
 三六西



橋ッ四

御宴會口は
まづ

目あり一先堀へ下つて後あれから直に發足せん其方は母嫁さなせ殿諸共に後の片付け諸事萬事、何もかも心残りのなき様に、ナ

ナコリヤ翌日の夜舟に下るべし我は幸ひ本藏殿の忍び姿を我姿と袈裟打掛けて編笠に

恩を戴く報謝返し未來の迷ひ暗さん爲今宵一夜は嫁御寮へ勇がなさけのれんば流し歌

口しめして立出れば兼て覺悟のお石が歎きアゝコレ申御本望さ斗りにて名残惜しさの

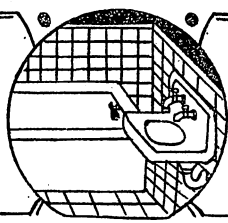
山々を言はぬ心のいぢらしさ手負は今を知死時さゝ様申さゝ様と呼べどこたへぬ斷末

覽親子の縁も玉の緒もわて一世の憂別れわつと泣母泣娘さもに死骸にむかひ地の回向

念佛は戀無常出行く足も立止り六字の御名を笛の首に南無阿彌陀佛なむあみだ是や尺

八ぼんのふの枕ならぶる追善供養聞の契は一夜ぎり心残して立出る。

化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水浄化装置
特許無臭便所



西區立寶堀北通一丁目
新一橋
岡部 商會
電話番町 一六二七六九
阪急 夙川
岡部商會支店
電話番町 一九七六



三勇士名譽肉彈

下元旅團長 竹本大隅大夫
 江下一等兵 竹本相生大夫
 北川一等兵 豊竹呂大夫
 作江一等兵 豊竹つげめ大夫
 松下中隊長 竹本鏡大夫
 小隊長 竹本小春大夫
 馬田軍曹 竹本隅榮大夫
 内田伍長 竹本長太夫
 便衣隊 竹本遊路太夫

鶴澤友次郎
 豊澤仙糸
 豊澤廣助
 鶴澤友造
 鶴澤友若
 鶴澤清二郎

松居松翁 原作
 食満南北 脚色
 鶴澤友次郎 作曲

三勇士名譽肉彈

(松田種次舞臺裝置)

志士は溝壑にあるを忘れず勇士は其元を喪ふを忘れずさかや、時しも昭和七年、月は如月下二日、御國に忠を筑紫路の響も高き三勇士、語り傳ふる敷島の大和の國の櫻花、幾千代かけてはほふらん、爰は所も上海に近き村落蓼家宅、霜さへ氷る曉に間近く敵を沖の石かはく間もなき汗や血に、まみれてつくす工兵の其軀壕に前進の命を松下中隊長折しもあれや舊曆の十七日の月冴えて怪しい人のうごめく影、誰か、ハイ私は廟行鎮鐵條網ある咄し澤山くする

事有中隊長殿怪しい奴をさらへました、ムよし連れて来い、ハイ、オイ、言事が有ならそこで言へ、それ廟行鎮中々堅い、機關銃澤山ある日本兵少ない中々落る事ないナ、外へ廻るヨロシイナ、黙れ貴さまは誰に頼まれてそんな馬鹿な宣傳をしに廻りよるか、怪しい奴だ、馬田軍曹繩れ、ハ、ア中隊長殿危ない事でしたナ、あぶない事だつた、オイ、馬田軍曹そやつ何か持てゐないか身体検査をして見よ、ハア中隊長殿軍隊手帳がありました、ムそふか、第十九路軍の正規兵です、ム、扱はそうか顔見合せ、油断ならじと囁やく折しも軍用電話、けたましく内田伍長は取上げてハ、ハ、ハ、松下中隊長です、旅團命令で有ますか、ハ、ハ、

人形

松下中隊長	吉田玉松
便衣隊	桐竹紋太郎
馬田軍曹	吉田玉市
大島少尉	吉田小兵吉
東島少尉	桐竹政龜
島田一等兵	吉田玉幸
古川一等兵	吉田光之助
高野一等兵	吉田覺三郎
黒澤一等兵	吉田玉徳
村田一等兵	吉田瓢毒呂
村上一等兵	吉田傳之助
北川一等兵	桐竹紋十郎
江下一等兵	吉田文五郎
作江一等兵	吉田榮三
内田伍長	吉田文作
下元旅團長	吉田玉次郎
兵士	大勢

い、復哨、本隊は其主力を持って十二日午前五時三十分を期し廟行鎮の總攻撃を開始す、松下中隊は其正面の鐵條網を爆破し、五個所に歩兵突撃路を開くべし、終り、ハ、ハ、ハ、分りました、中隊長殿命令が参りました、ム、中隊長殿電話に出て下さい、よし、ハ、松下大尉であります、ハハ分りました、本中隊は直ちに決死隊を募り確かに其時間までに敵の鐵條網を破壊し完全に突撃路を開きます、終り、さ答ふる聲も覺悟の一諾、馬田軍曹進み寄り、中隊長殿旅團の御命令でもあの敵の鐵條網は實に構築堅固で我爆撃機が日夜必死の奮闘も未だ何等の効果も無く尋常一様の手段では油も駄目だと思ひます、さつぶさに語る敵情に、松

下大尉につっこ笑ひ、其出来ない事を仕送るが日本軍人の誇りで有る、日本軍人の上には常に天佑有て守る、是日の本の常ぞかし、小隊長集れ、只今の旅團命令に依て當中隊は決死隊を募る、大島小隊長は三名宛、二組の先發班、後續班の決死隊を選ばせよ、東島小隊長は豫備班として三名の決死隊を選ばせよ、終り、復哨、大島小隊は、三名宛、二組の先發班後續班の決死隊を選ばせよ、終り、復哨、東島小隊長は三名の豫備班を選ばせよ、終り、よし、小隊長は選抜兵を集めてくれ、ハイ第一小隊島田一等兵古川一等兵高野一等兵、黒澤一等兵村田一等兵村上二等兵、第二小隊北川一等兵、江下一等兵作江一等兵集れ、聲に應じて

ばら／＼と居並ぶ諸士の勇しや、氣を付、
 番號、一、二、三、四、五、六、七、八、
 九、集合終りました、よし扱て、九名者に
 中隊長は一言す、只今旅團命令が降つた、本
 中隊は正面の鐵條網を破壊し五條の突撃路
 を開くべき重大なる任務を受けた、是れ本中隊
 の無上の光榮である、しかし此作業は尤
 困難である、されば今日迄多くの兵士は倒
 れ、様ざまの犠牲を拂つたが中々堅固の要
 害である、本隊は誓つて此名譽ある任務を全
 うし、目的を成就しなければならぬ、そ
 こで爰に決死隊を募る、依て此決死隊に選
 拔せられたお前達は一命を賭して此任務を
 全ふしてくれい、ハイ、我々決死の覺悟
 をもちまして、事に當ります、チーよく言
 つてくれた、嬉しいぞツ、諸君が國家の爲
 に盡さんとする赤誠の精神に對し、松下大
 尉愈々感激にたへない畏れ多いことではあ

るが 大元帥陛下に置かせられては此忠誠
 を聞し召さば嘸や至情の發露ぞと御嘉納あ
 らせらるゝ事であらふ、皆わかつたか、ハ
 イ、わかりましたと意氣冲天の勇士の言葉
 ナ、勇ましい天晴だ、口には言へど心には
 御國の爲さば言ながらあたら勇士を戰場
 の土さ化するか、哀れさ怯む心を取直し、
 氣を付け、只今より、擧手の禮を以て袂別
 にかへる、敬禮、互に擧手の一禮はこれぞ
 此世の名残りぞと別れてこそは進み行く。
 時の至るを三人が月の光りをあびながら、
 語るも清き、戦友の胸の内こそ由々しけれ
 作江伊の助こなたを見やり、ア、月はます
 く、呀えてゐるナア、オイ北川なにをぼん
 やり考へてゐるのだ、何か國の事でも思出
 したのか、ナニそうじやないよ、おれはひ
 そかに謀事をめぐらしてゐる、さでもいふ



現 代 的

電話 戎 三 七 五 六 番

九 町 跡 德 御 區 南 市 阪 大

のかな、兎に角考へてゐるんだ、ナニ謀事
 ハー、考へもくそもあるものか、此場
 合手段はたつた一つしかないのだ、貴様の
 手段でのは大低見當がついてるよ、負す嫌
 いの貴様の事だから、鐵條網へ喰ひつかふ
 ことも言ふんぢやろ、狼じやなか、よせ
 やい、アハー、互ひに通ずる心さ、オイ
 江下ゐるかと言ひつゝ来る内田伍長ハッ江
 下居ります、お前國から、郵便が來てゐる
 ぞ、お前ばかりうまくしてゐるナア、貴様
 も昨日來てたじやないか、そふだつたナア
 併しお前達選抜にあつてよかつたな、中隊
 長殿の御訓示もあつたが皆しつかりやつて
 くれよ、中隊長殿の處へもふ一度來るだら
 う、其時又逢はふ、待つてゐるぞ、と言捨て
 こそ急ぎ行く、江下手紙取上れば、オイ江
 下どこから來たんだお父さんからか、イヤ
 家からじやないよ、何處かの子供からだ、

では慰問の手紙か、ア、コレハ此間日本を
 立つ時久留米の停車場で逢つた少年からの
 手紙だ、フム、ではお前に天子様の爲に働
 いて下さいといふ、激勵の言葉を與へてく
 れたと言つて、スツカリ昂奮して居たアノ
 小學生からの手紙なのか、おれはアノ少年
 の一言の爲にいつでも死ぬる氣になつて、
 愉快に日本を出て來る事が出來たんだ、モ
 ウすぐ死ぬかも知れないが、こふして呑
 氣にしてゐられるのは、矢張りアノ少年の
 力なんだ、マア見てくれよ、こんな事が書
 いてあるよ、私の大事な兵隊さん、あなた
 は立派な手柄をして、久留米へ歸て來る日
 を私は毎日指を折てまつて居りますよ、あ
 なたの凱旋の時には家中お父さんもお母さ
 んも兄さんも妹もみんなで迎へに行きます
 私の大事な兵隊さん、本當に天子様の
 爲めに働いて死なないで歸て來て下さい、ア

登録商標 美音あめ
 贈用 命は是非のやみお
 御菓子 おかき おこし 文果豆 文果えい 味噌せん 銘菓珍味色々
 文樂座前 文樂座 電話六六九〇
 文樂座 小大種入繪形人果文

可愛い事をかくもんだナア、他人でさへこんなだもの、北川、江下に貰い泣きはいが江下が死んだらお前も死ぬか、江下が死なかつたつて、ごふせ死ぬんじやないかウム、そふだ、アノ鐵條網さ來たら今まで誰も手がつけられなかつたんだからな、一寸でも傍へよればソクボウ砲や爆撃砲であひせかけられるんだから、ごふせのがれつこはないんだ、そふだ、破壊筒をかつき込んださころで、口火をつける前にみんなやられて仕廻んだからな、今度こそは此我々の最後の働きが日本軍隊の運命に關するんだから、しつかりやらなくつちやいけんぞッ、ム、さつきお前が言つた謀事と言つたのは其手段を考へてゐたのか、俺も先刻から決心してゐるんだ、決心ならおれだつてしてゐるんだそれなら三人共同じ事を考へてるんだな、そふだ、じや、破壊筒を自分の

體へくくりつけて體と一緒に爆發させる考へなんだナウム此方法が一番上策なんだ、からナ、上策の下策のさいつてコレが日本軍隊に取てたつた一つの名策なんだ、自身自身が爆烈彈と一緒に敵の鐵條網へ飛込まふさいふんだ、是程慥な爆發の方法はないからナ、やるか、やらふ、しつかりやらふぜ、日本帝國の爲だ、作江、江下、北川、サコレテお互の一生の別れた、水盃さいふ處だがごふせ火に焼かれて死ぬ體だ、一つ煙草の呑廻しさいふのはごふだらうナ、成程、こいつは面白いテハ作江、お前から呑み初めるよ、じやおれから呑むさしよふよし來た、煙りはうすき紫の其あかうばふ響れの火互ひに目と目と心と心併しこうして死を決して見るさ存外氣が樂になるもんだナア、おれア是から芝居でも見に行く様なほごらかな氣がしてゐるんだよ、おれだ




つてそふだこうなるさ何だか呑氣になれたよ、併しうまく鐵條網に近付けられいいがそこが天祐だ、此三人の意氣で彼奴等をめくらにして見せらアオイソーラ見る、雲がでて来たぜ、月が隠れてくれりやい、がナア、フムアノ雲の具合じや、大丈夫だ、ハア、い、月だナア、十七日の月だ、アレを見ると思ひ出さずにやゐられれエナ、國のお母さんに別れた晩の事が、作江アノ晩の貴様の話を聞いた時、おれは貰ひ泣をしたよ、お前のお父さんは日露戦争のさき輜重輸卒だったので、勳章一つ貰はずに歸つて来たさいつてお母さんは一緒になつて口惜しがつてゐたそうだな、今度こそは此事を聞たらお前のお母さんも泣いて嬉しがるだらう、ム、子供の時から始終言はれてゐたんだ、立派な軍人になつて國家の爲に働いてくれたつて、其時が今恰度やつて来たんだ、

おれはそれを思ふさ北川、江下、俺も嬉しいよ、しつかりしろよサモウ時間も追つて来たから、そろく仕度をしなければならぬまい、フム中隊長殿に此計畫を報告して行かなければいけないだらふ、サアアノ人情深い中隊長殿の事だから、いくら決死隊は言へ、始めから死でかゝる様な無茶な事は許さないかも知れないぞ、それもそうだ謀事は密なるを何さか言ふ事があるだらふ仲間にも黙つて別れた方が一層サバくしてよかばい、成程それもそふだナ、男らしくて、其方がいゝや、サア是で此世に思ひ殘す事はない、ではホツく出掛けよふぜ折しよきこゆる機關銃、三士は耳を傾けてチ、先發班が出發したぞ、爆發せんじやないか、不發らしいぞ、オウ後續班も出發したぞ、やられたらしいな、フム味方は慥かに仕損じたぞ、あきれて暫し言葉なし、馬

料理上席
ルリグ
 追 半 時 一 十 夜

お 飾 平 日 ち



ちりち

大 阪 心 齋 橋
ちりち本店
 番 船 五 〇 〇 番

田軍曹かけ来りオ、イ残念だ先發班後續班も全滅したぞ、残るはお前途ばかりだ右翼は危機に瀕してゐる、大日本帝國の爲だ頼むぞくく言捨てゝこそ急ぎ行く、サ愈々やるのだ、見ろ月が隠れたぞ、天祐だたぞ有難いくく三人目さ目を見合はせて、心の覺悟御國の爲、身は肉彈の三勇士流石は櫻大和の誇り其花またぬ勇士三勇士互ひに抱き月影も雲にかくれて打出す砲彈の響き轟きて廟行鎮の要害は蜘蛛手を張りし鐵條網近づく事もならの葉の此手かの手も盡果てゝ策をほごこすすべもなし、折しも忍ぶ三人の影、破壊筒をひんだかへ亂射亂撃ものかはこ、探照燈の光りをさけ、鐵條網にせまり行く、天祐だぞ、オイ、點火だくよし来た 天皇陛下萬歳大日本帝國萬歳くの聲もろさも、天地もゆるがす大爆音さ、しもほこりし聖壘も破れて爰に突

撃路、

夜は明はなれ東天に輝き昇る日の御旗下元少將しづくと隊伍さゝのへ立出る、氣を付けつ、松下大尉の報告を委しく聞いて旅團長あまたび打うなづき扱は北川江下作江の三勇士の爲に聖固の鐵條網も破壊され突撃路は開かれ容易に我軍の勝利になつたるも、皆是三勇士の賜物じや、爰に下元旅團長以下戦友一同躍んで三士の英靈に氣を付け捧げ銃、(これより軍歌合唱)

肉彈こに奏功の響れを世々に傳ふらん。

四ツ橋
りよ

昭和七年
三月の文樂座
消息日誌

△三月一日

三月興行の初日開場。

△三月二日

鳴太夫改メ三代目呂太夫の襲名披露後援會始まる。

△三月五日

大阪城天守閣に於て、大阪市主催の文樂人形展覽會始まる。

△三月六日

BK吉例舞臺中織放送一妹春山道行戀の小田巻

太夫 南部、小春、源路他

結 吉瀨、團六、芳之助他

人形 文五郎、政龜、紋十郎。

△三月十一日

白鶴嘉納合名會社の招待觀劇會が開催さ

れました。

△三月十二日

八木商店主催の富士箱連觀賞會開催多數の好愛家がせ見へになりました。

△三月十五日

東京市會議員の方々が來阪され、文樂觀聽の意をきゐて、松竹白井會長は歡迎の招待會を催しました。

△三月十五日

宇治山田市の神宮皇學館の學生諸氏が多數來觀されました。

△三月十六日

大阪時事新報婦人會主催で「文樂を裏まで見るの會」を開催しました。當日休憩所で時事新報の石割松太郎氏の文樂に就ての講話、古藪師の挨拶並びに榮三師の人形の質物説明等があり有意義な會合でありました。

△三月二十一日

古曲復興の珍らしい名作興行も絶讃の裡に打上げました後援會其他皆様にあつく御禮申上ます。

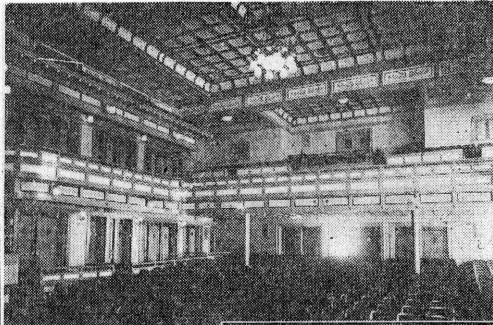
大坂御池

茶室

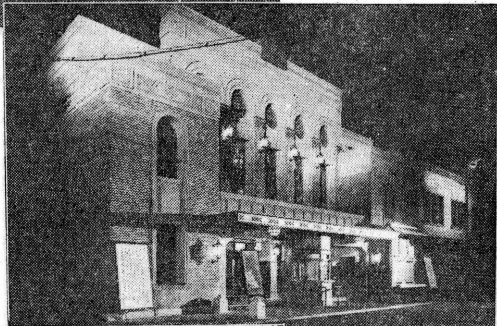
電話新町三三番



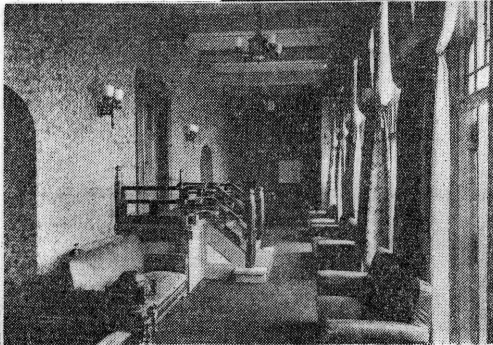
四ツ橋
文樂座
グラフィック



観覧席より無聲を眺む



文樂座外観全景



二階正面休憩所と特別御入口

文 樂 座 使 用 料 (一日)

時 間 場 所	收容人員	晝 (自正午 至午後五時)	夜 (自午後六時 至同十一時)	晝夜 (自正午 至午後十時)	
文 樂 座	約 850人	平日	80 圓	100 圓	160 圓
		土曜	80 圓	110 圓	170 圓
		日曜 祭	90 圓	110 圓	180 圓

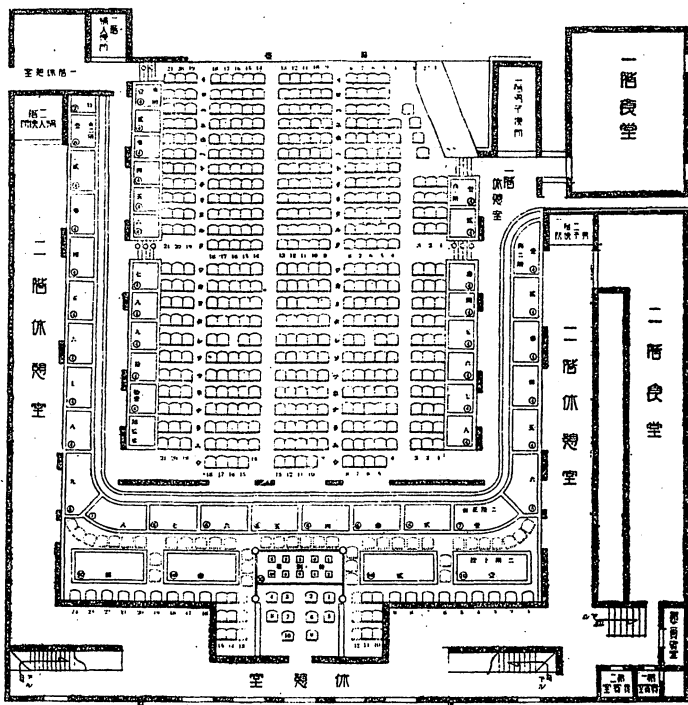
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器 具 御 使 用 料

器 具	備 考	數量	料 金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺	晝 夜	1回	10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同	晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ	晝 夜	1回	20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺	10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺	5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺	3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺	2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本	1圓
セトラチンペーパー		1枚1回	1圓
大 衝 立	晝 夜	1對	5圓
演 壇 設 備	同	1回	2圓
其 他	必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛		16圓
冷風裝置使用料			無料
暖風ラゲエータ使用料			無料

文樂座御席場案内



御、観、覽、料、の、外、一、切、御、不、要、の、上、大、部、分、椅、子、席、に、な、つ、て、居、り、ま、す、か、ら、お、一、人、で、も、御、愉、快、に、洋、服、で、も、お、樂、に、御、見、物、が、出、來、ま、た、お、出、入、が、御、自、由、で、す。

前、賣、切、符、壹、等、お、座、席、・、壹、等、椅、子、席、の、お、切、符、は、五、日、前、か、ら、發、賣、致、し、ま、す、ま、た、五、日、以、後、の、お、切、符、も、壹、等、席、に、限、り、御、豫、約、申、し、上、げ、ま、す、か、ら、上、圖、の、座、席、表、に、依、つ、て、お、早、く、御、望、み、の、御、場、席、を、お、申、し、込、み、に、な、れ、ば、お、心、の、ま、い、に、お、好、き、な、處、が、御、自、由、に、さ、れ、ま、す、御、用、命、の、節、お、呼、出、し、の、電、話、は、

南、四、七、一、一、番、で、御、座、ら、ま、す

・、切、符、賣、場、右、指、定、席、切、符、は、當、日、前、賣、ま、も、正、面、西、側、本、家、入、口、に、て、發、賣、し、て、居、り、ま、す。

二、等、席、・、三、等、席、切、符、は、當、日、正、面、入、口、に、て、發、賣、致、し、ま、す。

尚、多、人、數、様、お、團、体、様、の、お、申、込、も、御、相、談、い、た、し、ま、す。

文樂座

使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ
但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用ヲ必ズ其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用ヲ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセヌ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用

十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取

御休憩

一階西側の御休憩所へ

お茶と設備が御座ります。
蒸タオルの「レートローション」使用

各廊下にも喫煙臺が御座りますから
お煙草は此處で召上
て下さい。
場内の喫煙は御遠慮
下さい。

お土産

文樂木版手摺繪葉書

春陽會に於て文樂繪に就て
定評ある齋藤清二郎氏の作品

・ 毎月發行

三枚一組

美しい包裝共

一部

金五十錢

フランス語の

『文樂人形芝居の研究』

宮嶋綱男氏著

一部 金壹圓八十錢

木谷蓬吟氏著

『文樂今昔譚』

一部 金二

圓

月刊雜誌

『道頓堀』

一部

金三十錢

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食のバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室)

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携は品

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。お帰りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帶願ひます。

お場席

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居ります。からお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げます。から御休憩所でお自由にお飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めます。から、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。から御使用下さい。

御休憩の間は

四ツ橋

文

樂

座

前賣切符専用電話南四七一八番

電話南 七四〇八番 三七八八番

昭和七年三月廿日印刷
昭和七年四月一日發行

大坂・四ツ橋文樂座
發行人 大塚 良三

編者 成山 桂三

印刷者 永井太三郎

大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

文樂座の御宴會

席子椅等……………は覽觀御
食洋・食和……………は事食御
入本床さ劇役……………附番 (分様名一御)也圓五金
影撮別たれるを形人…真寫念記
(すまし致成速様る來出のり歸持お日即)

すま願に前日五けだるな上以様人廿は込申御

いさ下げ附申おへ番壹壹七四兩は話電お

落付た氣分・春と俱に朗かな
大阪でたつた一つの宴會劇場



商 堂
品製許特賣專



栄養志る六

標

録

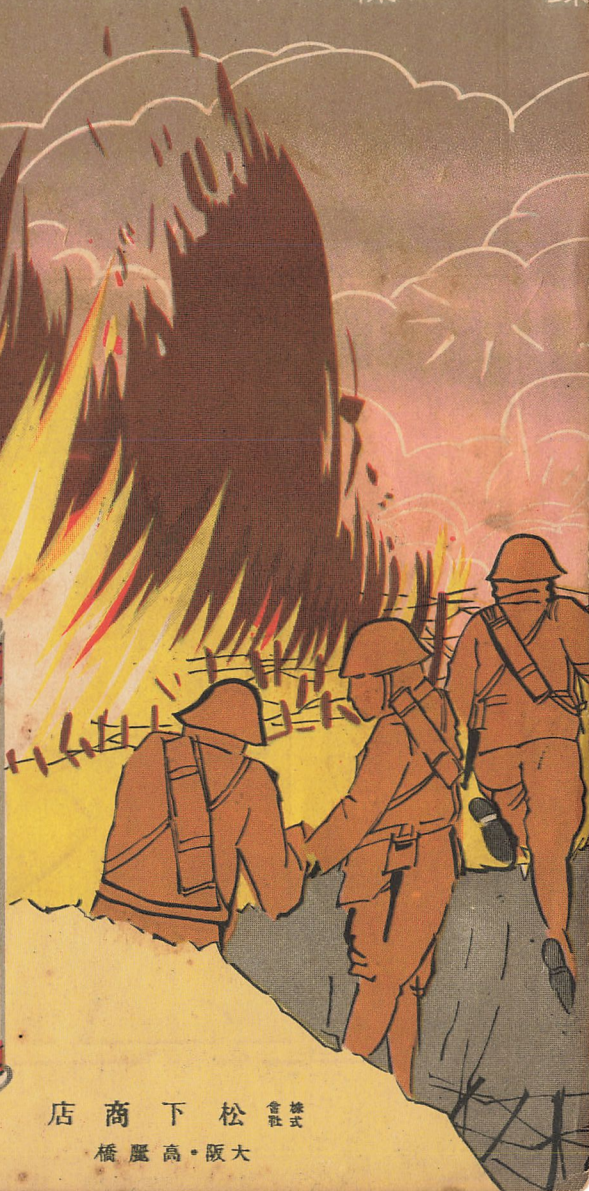
ミクワの榮ね
爆彈三勇士
一家の喜び
戦勝の味
榮養志る六

類似品ありミクワニ印と
御指定を乞ふ



定 價

五十人分入 一 罐 五 十 錢
二十人分入 一 罐 二 十 五 錢



店 商 下 松 橋 式 株 公
橋 麗 高 ・ 阪 大